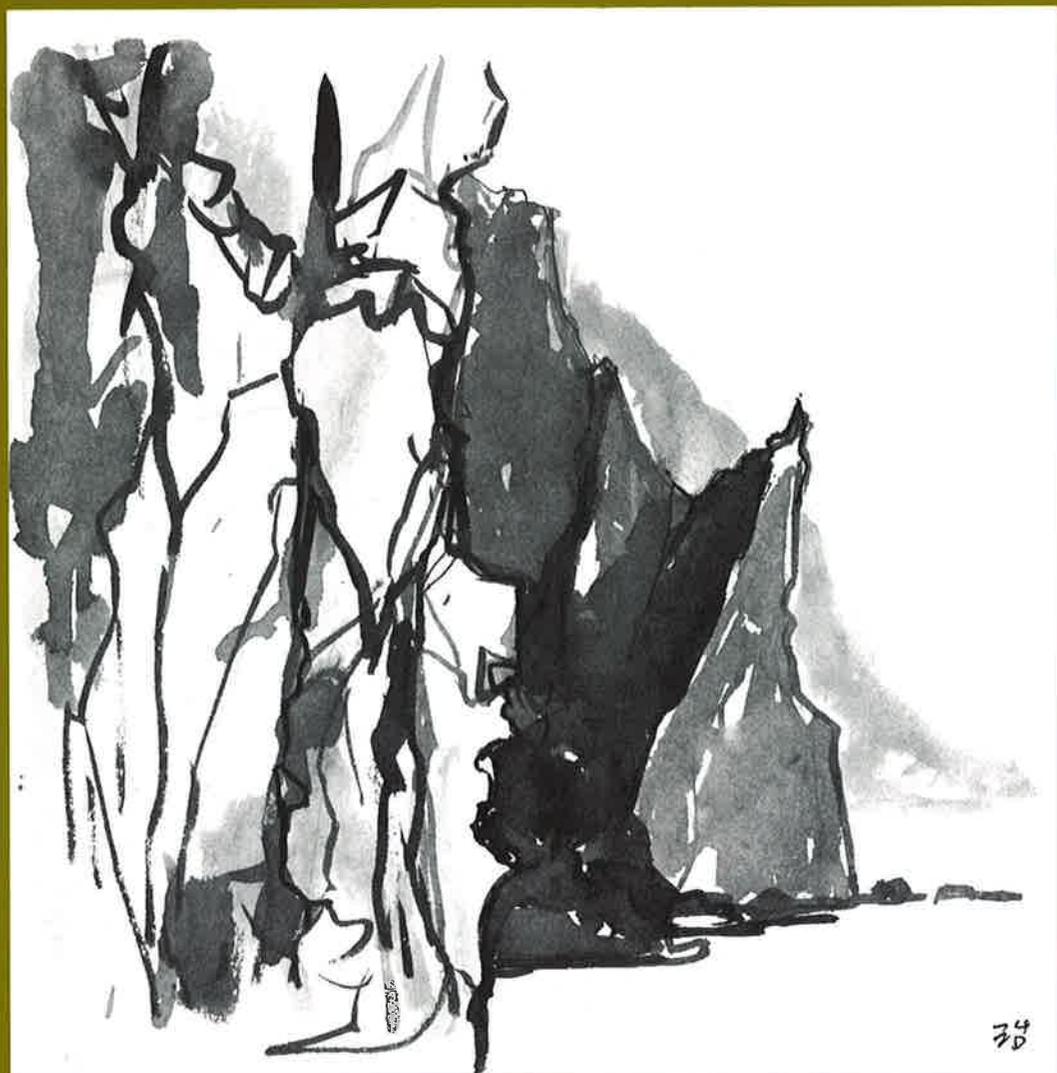


# 波人鳥

第 10 号 1989



室蘭市医師親交会誌

# 波之鳥

第 10 号      1989

室蘭市医師親交会誌

目次

表紙(銀屏風からハルカラモイ) 加藤 治良  
カット 竹内 隆一

インド雑感 ..... 高田 芳朗 ..... 1

指紋と遺伝情報 ..... 高橋 陽夫 ..... 8

『扶氏医戒の略』 ..... 阿部 昭治 ..... 11

閑吟風流抄——室町小歌—— ..... 加藤 治良 ..... 15

音楽の散歩道  
『聴くくすり』 ..... 安斎 哲郎 ..... 18

編集屋 座談会 ..... 十年一流れ ..... 21

上田 智夫 大岩 昌生 大久保洋平 小國 親久 加藤 治良  
児玉 直彦 澤山 豊 高島 信治 三村 博通 村井 玄乙  
青木 茂 大島 勝彦 高橋 則夫

あんらくいす

私と政治 ..... 斉藤 修弥

ウィーンの実さん ..... 上田 智夫

der Punkt ..... 竹内 隆一

純血教育 ..... 室江 蘭

平成元年親交会旅行 ..... 35

快晴の旭岳 ..... 黒光 康夫

医師親交会旭川旅行記 ..... 斉藤甲斐之助

編集室へのお便り

会員異動

編集後記 ..... 加藤 治良 ..... 40

高田芳朗

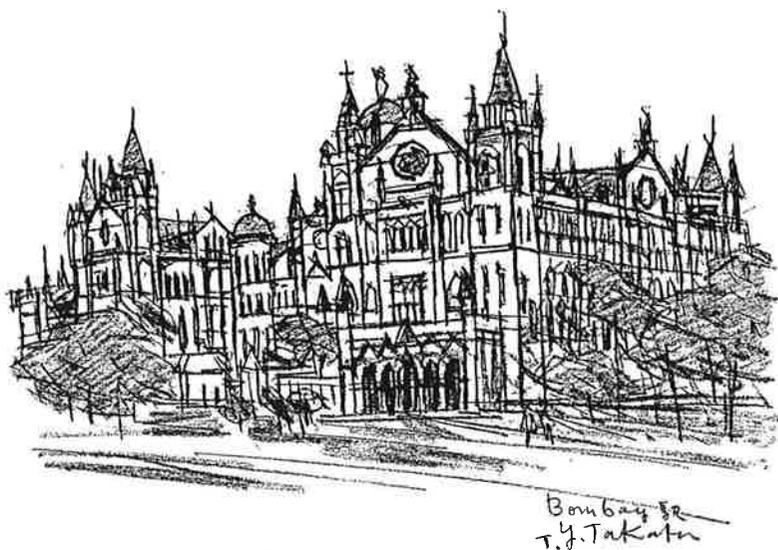
初めてのインド訪問

大阪から延々十四時間の長くて退屈な空の旅の末に、やっとインドのボンベイに着いた。空港に降りると、十一月だというのに蒸し暑い空気が一面にただよう。ホテルは、一度聞いたら忘れないう名前のタージ・マハル・ホテル。一流ホテルで、アポロ・ブン



タージ・マハル・ホテル(左)とインド門

ダーというボンベイの一部にあり、ホテルのすぐ近くには黄色の玄武岩でできた大きな「インド門」がある。インド門はボンベイの西岸に建ち、大英帝国の勝利の名残りをとどめて今もその威容を誇っている。この附近を散策すると、海を渡ってここを吹き抜ける風が涼しい。ボンベイは世界でも有数の大都市で、

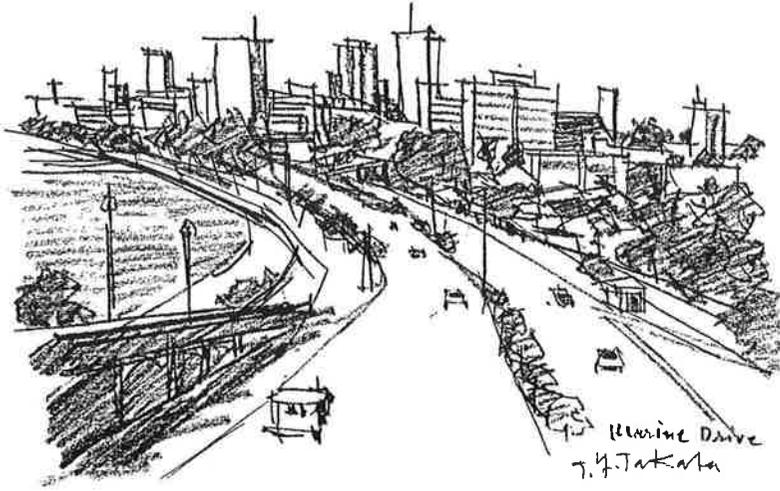


ボンベイ駅前通り

意外にも三十階、四十階建ての高層ビルが林立している。今日ではヨーロッパはもとより、世界各地から直行便が多数乗り入れているということである。

昨年十一月に、ボンベイでアジア産業保健学会が開催され、インドを訪問する機会を得た。インドは仏教の生まれた先進国であり、一度は訪問してみたい国であった。気候、風土、生活などは日本や日本人のそれとは対照的で馴染みにくいと聞いていたがど

うだろう。  
 訪問してみても、先ず感じたのは極端な貧富差と衛生状態の悪さであったが、レセプションやパーティーで出会ったインドの人々は寛大で礼儀正しく、謙虚な印象をうけた。さすがに仏教の国の故  
 であろうか。



女王のネックレスと呼ばれるマリン・ドライブ(ボンベイ)

## デカン高原を行く



デカン高原

エローラ、アジャンタはデカン高原の西側にある小村で、ここには世界的に有名な石窟寺院がある。インドの僧侶たちが何百年もの歳月をかけて彫ったという、これらの石窟寺院をぜひ見たかった。

ボンベイからアウランガバードまでは、かりに墜落しても決して不思議でないようなインド国内航空の中古飛行機に乗り、アウランガバードからエローラ、アジャンタまでは、これまた小さなオンボロタクシーに乗ってデカン高原をつつ走った。

デカン高原は、お世辞にも肥沃とは云えない広大な平野の処どころが丘陵になつている。平地には糸のように細い川が流れて、その周辺には多少の草木が生えているが、そのほかは小さな灌木が点々と見えるだけである。この大きな丘陵の上はどうなっているのだろうか。たまたまクルマで丘陵の上に登ると、これも平地と全く同じように道があり、細い川が流れて灌木が生えている。小さな小屋があつて、痩せた牛が時々見られる。

北海道でこれだけ走ると、さしずめ有珠山あり昭和神山あり、そして洞爺湖を望む景観が楽しめるのだが、インドではそんなわけにはいかない。一時間前の景色も、今の景色も、一時間後に見えるであろう景色も、ただただ大平原が広がっているばかりである。アジャンタに予約したホテルで一休みしてから、一気にエローラ、アジャンタの両方の石窟寺院を訪れることにした。

## 山を彫って造った石窟寺院

エローラは、アウランガバードの北西約三〇キロにある小村。丘の中腹に二・五キロにわたって広がる石窟寺院群は、アジャンタとともにインド宗教芸術の至宝といわれる。

三十四の洞窟があつて、それぞれが仏教、ヒンズー教、ジャイナ教に分かれている。最も有名なのが第十六窟のカイラーサナータ寺院で、二百年の歳月をかけて山を彫り抜いて造った寺院である。他の窟院の横穴式とは異なり、山の真上から掘り下げて造った。のみと金槌で掘り出した石の量は二〇万トン以上にのぼると



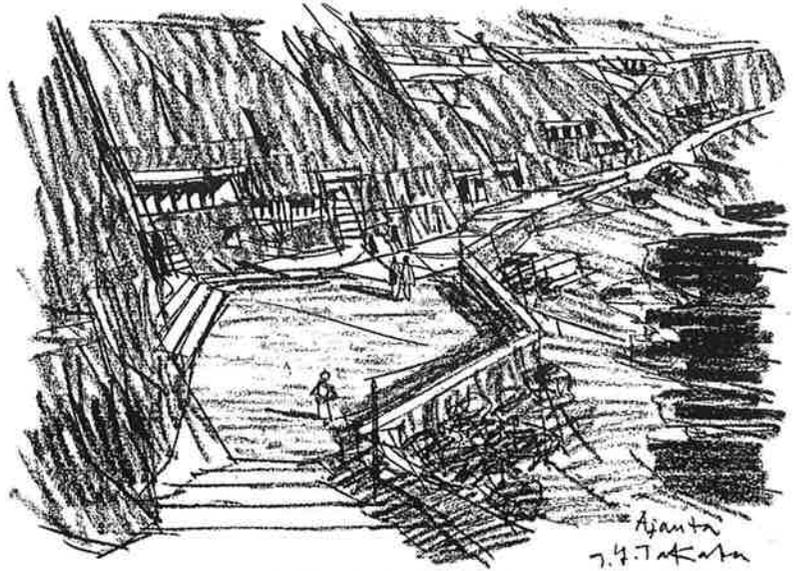
エローラの第16窟寺院

いわれる。気の速くなるような時間の中で、どんなに苦勞して彫ったものか。寺院の回廊にある踊るシヴァとか、シヴァとパールヴァティーの結婚の場面などが素暗しい。

アジャンタは、アウランガバードから北に約一〇〇キロの地点にある。アジャンタには、紀元前二世紀から七世紀にかけて、ワグラー河沿いに造られた雄大な洞穴仏教寺院群がある。二十九の洞窟があつて、中の壁画や彫刻が当時の女性や宮廷生活、仏伝などを詳細に伝えている。

とくに第一窟では、仏陀の前生物話から題材をとった宮廷で会話する王と王妃とか、豊かな胸とソフトな曲線美の女性たちの壁画があり、それらの如何にもチャーミングな顔だちなど、時代を超えた魅力を感じるのではなからうか。ほんとうに、インドが世界に誇る遺産であると云つてよいだろう。

蛇足になるが、この石窟寺院は八世紀ごろ仏教の衰退とともに忘れ去られ、密林に覆われてしまふが、一八一九年に狩猟中の英国軍人に発見されて一躍有名になった。



アジャンタの洞穴寺院

## カースト制度ごぼれ話

インドは自由の国である。何を着てもよいし、裸で道路を歩いても誰も文句を云わない。早い話が、一枚の布を腰に巻いてさえいればよい。あるいはまた、七十歳の老婆が真赤なサリーをまともしても少しもおかしくない。しかしインドには、人間の基本的な

自由を束縛する社会のしくみ「カースト制度」がある。インド人の多くは、自分のこの世のすべては前世の結果であると思っっている。良い境遇の子として生まれるのは、前世でたくさん善行を積んだ結果であり、その逆の場合は前世で悪行を積んだ報いであると思っっている。したがって底辺の階級に生まれた人は、この世ではどうしようもなく、来世を期待するだけしか許されない。

だからインドの人々は、良い来世に恵まれるよう、この世での行いを大切にし、それぞれの立場で必死に働き生きているのである。

小さい子供までが知恵をしぼって一生懸命働いている。

何かで読んだ話であるが、たとえば役所へ行って何か手続きをしようと思っても、書類を運ぶピヨン（メッセンジャー）が来なければ書類はいつまでも机の上に置かれたままになる。また、学校の先生は床が汚れていても決して拭こうとはしない。それぞれの担当



インドの街頭床屋(ジャイプール)

がいるからである。

カースト制度は、社会を分断するシステムのように考えられているが、同時にインドを統合するシステムでもある。洗濯人も床

屋も、商人もバラモン（司祭）も、みんな全インド的規模で、その社会のしかるべきところに位置づけられている。

通訳のインド人のラマさんがこんな話をしてくれた。「カースト制度の最低の階層は乞食という事になっている。しかし、実はその下にもう一つの階層があるのです。それは、田舎から乞食になろうと一念発起して都会に出てくる。しかし武運拙く、食物にありつけなくて途中で飢え死にってしまう。これが最低の階層なのです」ということである。

## 乞食に施しをするな

インドの貧しさは鮮烈である。到るところに乞食がいる。インドの乞食に施しをするな、もし施しをすればきつと後悔すると注意された。とにかく、ちよつと街を歩くと必らず数人の子供がまつわりつき、「ア・ルピー（一〇円おくれ）」と云つてどこまでもついて来る。ポケットには、こんなときのために一ルピー札が沢山入れている。気前よくばらまきたい気持を抑えて「ノーノー」といつて振り払うが、あまりよい気分ではない。

アーグラでわれわれのバスが止まったときに、赤子を背負つて、さらに一人の子供を連れれたお母さん乞食がバスの窓ぎわにきた。身ぶり手ぶりで「何も食べていない。お腹が空いて倒れそうだ」と訴えている。丁度いい、日本から持つて来た上等のお菓子が一袋あったので与えた。するとどうだろう。少しも嬉しい顔をしないうで「何んだこんなもの」と云つたかどうか、パイと開きなおつて袋を子供に投げ与え、こんどは別のバスの方へ行つてしまった。この程度ならまだよいが、以下は同行の教授先生の体験談である。乞食の子供達あまり可哀いそうなので、とうとう財布をとって出して何ルピーかづつ与えようとした。すると突然、どこから



子連れの乞食（アーグラ）

ともなく数人の大人（の乞食？）が現われて「ケンキン」とか「キフ」とか片言の日本語で云い寄り、瞬間に財布から数万円を引き抜かれてしまった、ということである。一体彼らは、われわれにも分らない、得体の知れない「献金」の事を知っているのだろうか。

インドの乞食には手足のない人が多い。ラマさんに聞いたら親が子供の手足を切り落とす例も少なくないという。一生涯乞食をするのだから、如何にしたら多くの施しを受けられるか、考えた末の知恵なのであるか。なんとも哀れな話である。

## インドカレーとインドビール

インド料理というときすぐカレーライスを思い浮かべるが、カレーライスだけがインド料理ではないし、だいたい日本のカレーライスと本場のそれとはかなり違うようだ。

インドには長い伝統につちかわれた独特の料理がいろいろあるらしい。ボンベイのホテルでは、これをインドカレーという、タ



ターリーに盛りつけたカレーセット

ターリーに盛りつけたセット料理を賞味した。ターリーとは金属の盆に碗のような器が七つ並べてある。この器にはそれぞれにトマトスープ、チキンカレー、マトンカレー、プレーンヨーグルト、野菜カレー、ダールカレー、米粉のプディングなどが入っている。このほかに盆にはタンドリーチキン、ナーンかチャパティのパン類が盛られてあり、これらのパン類をちぎって碗のタレをつけて食べるのである。おいしかったかと聞かれるが、何回か食べてい

るうちに、きつとこの味の虜になってしまおうのではないだろうか、と思った。

インドにはジャイナ教徒のように、肉を食べずに菜食しかしない人が多いが、イスラム教徒は肉食であり、ヒンズー教徒はその両方に分かれる。肉食の場合でも、牛はシヴァ神の神聖な乗りものなので食べない。また、イスラム教徒は豚を不浄なものとして食べない。だから、インドで食べられる肉はマトンとチキンということになる。インドの街中を、持主のいないノラ牛が我がもの顔で歩いているのも頷かれる。

さらに菜食者は魚や卵を食べないらしいが、牛乳と乳製品は好んで口にする。唯一の重要な蛋白源である。ついでに菜食者料理で野菜カレーというのがあるそうだ。どんなものか見当もつかないが、種類も多く大へん美味らしい。前述のセット料理の野菜カレーは、カレーというよりは野菜のココナッツ和えのような味がした。

インドでは生水は絶対に飲んではいけない。日本のように消毒殺菌された水道が完備していないからである。屋台にはジュースもコーラもミネラルウォーターも売られているが、これも絶対飲むなど注意された。メーカーの瓶を使って、中味は手製が多いからである。

仕方がないので各人が魔法ビンかジャーを用意して、ホテルの朝食どきに一日分の沸騰した湯をつめてもらう。その中に紅茶かウーロン茶のパックを一袋入れて、チビリチビリ飲むとけっこう美味しい。インドの飲みもので、胃腸の弱い日本人が飲んでよいのはビールだけ。日本ではビールを好んで飲む方ではなかったが、インドのビールは実においしかった。のどが乾いているせいもあったろうが、とにかくうまくて一日二本ぐらいつつ注文して飲んで

## 買い物は掛け合いで始まる

インドで買い物をするときは大へん厄介だ。ほとんどの商品に正札などついていないから掛け合いになる。シャツ一枚買うにしても、高いからまけると頑張らねばならない。とくに外国人には高い掛け値を云うらしい。努力と時間が必要になる。ふつうは云い値の半額ぐらいから掛け合い、七掛けぐらいで商談成立すれば成功だという。土産物にはドルの値札がついているが、同じものが店によって倍も値段がちがう。つまりこの場合は、安い方はあまり値引きしないが、高い方は根気よく掛け合えば半額ぐらいになる。だからインドの買い物は疲れる。

インドの屋台でバナナを一房買ったら五〇円だった。計算したらバナナ一本が三円にしかつかない。物価は安い、その代り給料も安い。ラマさんに聞いたら、インド人の平均の月給は(円に換算したら)ドクターが三万円、ナースが二万円、一般事務員は一万円、タクシートの運転手は七千円ぐらいだそうだ。この給料はぜいたくさえしなければ結構生活できるという。この国でマンションやアパートを買うとなると驚くほど高い。ふつうのマンションは一億円で、庶民には全く手が出ない。一番安いアパートでも一千万円はするそうだから、結局は地面にゴザを敷いたり、テントを張って生活するしかないことになる。

## 親は頭が痛い、娘の結婚式

ジャイプールのアンベール城や天文台、博物館を見た帰りに、アンベール城の別荘であったシテイパレス・ホテルでひと休みしていた。夜の九時出発予定の飛行機が、例によって四時間も遅れ



インドの結婚式(ジャイプール)

たおかげで、このホテルで行われた結婚式をゆっくり見るこ  
とができた。

結婚式は夜の七時頃から始まる予定である。その少し前になつたら、ラッパや太鼓の楽隊を先頭に威勢のよい花火を鳴らして、数百人の行列がワイワイ騒ぎながら、ホテルの広い庭に入つて来た。行列は上等のサリーで盛装した御婦人が多

いから、多分良いところの結婚式であろう。庭には舞台が組んであつて、当然のことながら最上段の花で飾つたイスには花嫁花婿が座つて式が始まる。豊稜の印のお米がまかれたり、お金が積まれたり、いろいろセレモニーがある。

インドにはさまざまな宗教の人がいて、結婚式のやり方が異なる。同じ宗教でも、カーストや地域によつていろいろである。大ていの場合、花嫁側が花婿側に多額の贈与金を出すのがふつうとされている。結婚式や披露宴は所によつては延々何日も続くことがあり、若いカップルにとつては二人きりになるのが待ち遠しい。インドでは九五%が見合い結婚で、離婚は一人に一人というから立派である。

花嫁は日本とちがひ、表情が豊かで、終始にこにこして愛嬌が

いい。額につけた真赤なビンディ (Bindi) がよく似合い印象的だった。余談だが、このビンディは、最近ではファッション化してサリーの色に合わせてブルーや緑、ピンクなども好んでつけられる。ただ未亡人がつけることは許されない。だからガンディ首相もつけていなかったという。

ところで、褐色の肌の女性にまわれ、風にそよぐサリーほど魅力的なものはない。あの華やかなサリーはいつたい幾らくらいするのだろう。大ていは一万円〜二万円で購入するそうだが、ホテルのウインドウにあつた豪華なのは三万円〜五万円であつた。もちろん格安のサリーもあるだろう。日本の着物がそうであるように、サリーもピンからキリまであるらしい。ラマさんによると、「最近の若い女性はあまりサリーを着ないが、年頃になるとおしやれをして着るようになる。娘を嫁入りさせるときは親は頭が痛い。持参金のほかに、サリーを一〇〇枚ぐらい持たせるのがふつうだからだ。(前述のように、一カ月分の給料でサリーを一枚買えるかどうか大へん厳しい話である。)この頃はサリーよりも、日本製のスクーターを持って来いという若者もいるそうな」と云つて大声で笑つていた。

## 指紋と遺伝情報

高橋 陽 夫

人は胎生五カ月位ですでに、十指にそれぞれ名札が付けられるという。これは自己と非自己を区別し、自己が絶対唯一の存在であることを示す独特固有の手段である。名札すなわち指紋は、万人不同また万指不同、終生不変一生不滅である。一卵生双生児で

も同じ指紋はないといわれている。身体髪膚五臟六腑についても機能こそ互いに似てはいるが、自己と非自己が厳重に区別され、更に臓器形成細胞についても、更にまたその細胞が持つ遺伝情報についても、自己と非自己が徹底的に区別され、自己と非自己が互いに全く同じということはあり得ないのである。自己は絶対自己、非自己はまた絶対非自己である。したがって自己と非自己の交換、自己と非自己との合同合体はまた全く不可能事に属するのである。まことに天の摂理と申すべきであろう。詳細に検討するならば、各臓器の表面にも、他人の臓器と間違われぬためでもあろうか、自己固有の指紋に似た名札ならぬ紋様が発見されるのではと思われる。

指紋の発生には遺伝性があるといわれている。したがって指紋発生は遺伝情報に支配されているものと思われる。すでにまた精細胞すなわち精子のもつ遺伝情報には同じものは全くないといわれている。これは同じ自己すなわち同じ独立した唯一の存在はなないことを示し、個体はそれぞれ皆独立した唯一の存在であつて互に他人互いに異物であることを示しているのである。

人体は、それぞれの遺伝情報を持ち、それぞれの目的をもつた細胞同士が、秩序よく配列した集合体である。細胞と細胞が集合接着するには、細胞同士をつなぐなんらかの物質が存在するはずというところで、ついに京都大学竹内教授らが発見した細胞と細胞をつなぐ物質すなわち細胞間接着物質すなわちカドヘリンの存在はすでに周知の事実である。この物質は細胞の表面にある一種の接着剤のようなもので、同じ型のカドヘリンをもち同じ遺伝情報をもつ細胞同士は互にくっつくが、異なる型のカドヘリンをもち異なる遺伝情報をもつ細胞同士はくっつかないということである。移植臓器が生着するには先ず互いの組織細胞が接着しなければならぬ。カドヘリンは生命の設計図であるDNAによつて

遺伝情報の支配の下に、それぞれの細胞でつくられる蛋白質といわれている。

切創が治癒するには、まず創縁と創面にある細胞同士が、同じ遺伝情報の下に分裂増殖し、次いでカドヘリンが作られ、互いに接着癒合していわゆる自然治癒を果たすものと思われる。この治癒過程は自給自足、自力本願、凡て自前、まことに肉體組織の神秘的特質と申すべきである。この自然治癒作用にこそ外科手術の可能性の根本があり、反自然治癒作用にこそ互いに異物である移植臓器の癒合不可能性の根元があるものと思われる。

次に移植臓器組織細胞の相互接着癒合のことであるが、組織適合諸検査合格の下に、ドナーの臓器すなわち心臓はレシピエントの所定の局所に吻合されて、接着癒合が期待されるのであるが、ドナーとレシピエントはもとも非自己同士、互いに他人である。したがって相互の局所の細胞はそれぞれ異なった遺伝情報を持ち、生産されるカドヘリンの型も互いに異なっているので相互の組織細胞は接着癒合しないことになる。ただ密に縫合されているだけである。すなわち接着癒合したかに見えるが、それは偽似の癒合であって本来の癒合ではなくやがて互いに分離する運命にあるものと思われる。

次に拒絶反応を回避するための移植組織適合性検査であるが、数ある中で、主要組織適合抗原検査が重要視されているらしい。ところがこの検査は万全でもなく最善でもなく次善の検査である。すなわち移植抗原の凡てが完全に一致適合することが理想ではないが、現実的には困難ということで、万全でもなく最善でもない次善の策であるこの主要組織適合抗原検査が用いられることになっている。大体適合すればよいのであろうか。万全の策でもなく最善の策でもなく次善の策というところに問題があるので、はなかるるか。人命に関する限り検査は万全でなくてはならない。

次善と最善、最善と万全の間には移植不適合抗原が残っていることになる。この残存の組織不適合抗原がまた問題である。すなわちこの残存抗原が宿主（レシピエント）との間に拒絶反応を起してくるものと思われる。この拒絶反応は抑制剤サイクロスポリン、副腎皮質ステロイドなどに依って抑制されるのであるが、完全に抑制されず小康状態に入るのである。すなわち拒絶反応の可能性は一時休止するが潜伏するのである。臥薪嘗胆、二年三年更に四年五年の内に、捲土重来、あたかも残り火が突然発火して大火焼失を招くが如く、突然作動爆発、宿主は、侵入しているよそ者の心臓と共に爆死するものと思われる。哀れにも残酷物語一巻の終わりと申すべきであろう。もつとも急性拒絶反応は移植後二週間位で出現し、拒絶反応の90%以上は一年以内に起こるといわれている。

受精卵は母体とは互いに異物関係にあるが、十カ月の間は子宮内膜に着床、以後胎児完成まで母体内に滞在を許される。母体との間に拒絶反応が起こらないのは、母体自らがこれを抑制し、互に融通妥協するのかもしれない。しかし滞在期限が到来すれば、母体はいよいよ拒絶反応（陣痛）を発動し、自然の非常口から異物の胎児を排出（出産）するのである。

心臓移植では、切開口が二重三重に縫合され、やがて挿入口は組織細胞の自給自自力本願で接着癒合し、自然治癒して閉鎖し、移植心は宿主の体内に完全に閉じ込められ永久に異物として存在することになる。宿主の肉體は移植医の意図に極力抵抗、折角の移植心を除去するべく執拗に拒絶反応を繰返すが、その都度抑制剤で抑圧される。勿論異物排出の非常口はなく、互いに融通もなく妥協もない。抑制剤の副作用はいよいよ致命的、ついに悲惨な最後ということになる。

同種の樹木は接ぎ木でよく活着する。鉄は熔接で容易に接着す

る。それはいずれも彼らの組織構造が単純で、その上拒絶反応がないからであろう。またそれは、若し彼らに遺伝情報やカドヘリンがあるとすれば、いずれも同一同型であるからであろう。人間は反対に組織構造が複雑で、遺伝情報は互いに相異し、カドヘリンの型は互に不同、その上拒絶反応をもっているので互いに癒合することはまず不可能である。人間は木でもなく鉄でもなく、いわゆるホモサピエンスである。

感染症、リンパ腫、急性腎毒性、慢性腎毒性、肝毒性、高血圧症、末梢神経症、糖尿病、白血球減少症など以上いずれも拒絶反応抑制剤サイクロスポリンの副作用である。このうち感染症が最大の副作用でほとんどが致命的である。サイクロスポリンはまことに怖い有害薬品である。厚生省は、なぜこのような危険を孕む薬品を使用禁止にしないのか不思議でならない。もつともこの薬品は臓器移植には絶対不可欠の必需薬品であるだけに、背に腹は替えられないので、都合上黙認しているのかもしれない。しかし患者は常時戦戦恐恐生命の危険を警戒していなければならぬ。しかしまたこの薬品を使用禁止にすれば、臓器移植はお手上げご破算ということになりかねないのである。進退維れ谷まるとでも申すべきか。サイクロスポリンは角を矯めて牛を殺すたぐいの薬品ではなからうか。

拒絶反応及び拒絶反応抑制剤投与による不幸の転帰は、医療訴訟の対象になり得る可能性なしとは断言出来ないであろう。副作用を知らずに投与したのであれば、まだ情状酌量の余地はあるだろうが、万全承知の上での投与であれば、未必の故意とかで酌量の余地は全くなく、当の外科医は全責任を負わされ、厚生省もまた責任を問われることになりかねないのではと思われる。

43年8月日本で最初に、札幌医大で和田教授とそのグループによって心臓移植を受けた少年宮崎信夫君は、術後八三日目に死亡

している。死亡の原因は拒絶反応と感染症といわれている。

59年4月に渡米、翌月日本人としては二番目に心臓移植を受けて帰国した牧野太平さんは、術後九二〇日目に悲惨な死に方をしたのである。すなわち「帰国後の翌年拒絶反応抑制剤の副作用が出はじめ、肺全体が粟粒結核に冒され、やがて骨粗鬆症で腰骨と胸骨を骨折し、その後併発の腎炎も悪化、胃の出血、カビなどによる肺感染を起こし、まもなく意識不明となり死亡」と報道されている。

心臓移植適応患者は、六カ月生きられるかどうか生存の可能性が10%以下のものとなっている。したがってこの適応患者は、心臓を移植しなくても生きられる期間が大体六カ月ということになる。したがっていうところの心臓移植患者の生存率日数は、当然の六カ月を差引いた日数が実質生存日数ということになるのではと思う。したがって先の宮崎君の生存八三日は逆に九七日寿命を短縮されたことになり、牧野さんは生存九二〇日となっているが、実際には七四〇日生命を延長したことになる。

心臓移植後の生存は専ら医薬品に依存しているので、自力的生存ではなく他力的生存（延命）である。したがっていうところの生存率は延命率とすべきではなからうか。統計には一年生存率はあるが六カ月生存率は見当らない。これは、心臓を移植しなくても当然生きられるこの六カ月をそのまま一年生存率の中に算入してしまっているのかもしれない。したがってこの一年生存率は六カ月延命率とするのが妥当と思われる。

心臓移植の総本山スタンフォード大学は、最近四年間の心臓移植患者の一年生存率を80%以上と発表しているが、これは六カ月延命率は80%以上と書直すのが妥当と思う。もつとも移植心がレシピエントの体内に何日ひっついていたらか移植の当日を起点にするのであればこの六カ月操作は不要である。すなわち、患者は生

命の座である自分の心臓をすでに摘出除去されているのであるから問題の延命日数は、患者自身のものでなく、移植心そのものの縫合に依る附着日数ということになるのである。

六カ月は心移植適応患者に保証された最高の生きる権利である。移植後六カ月未満で死亡すれば提訴の恐れなしとしない。現在の心臓移植はまさに国際コンクールの舞台さながらである。課題は症例数と延命率である。後は野となるか山となるかは問題ではなく、ただただコンクールである。心臓移植は、公然の許された生体実験ではなからうか。また外科医の冥利でもあらうか。目下わが国でもコンクールに出演すべく動物実験で準備におおわらわ、暗れの舞台を夢見てひたすら待ちわびているらしい。近代医術は遊びの具であつてはならない。楽しみは邪道にのみあるのではない。正道にこそ真の楽しみがあるのである。免疫の原理に目をつぶり、また遺伝の根本原理に背を向け再びまた拒絶反応に目をつぶり、ひたすら移植にのみ専念するのであれば、臓器移植は責任もなく保証もない全く自己（外科医）本位と疑われても仕方が無いのではなからうか。

一九六七年、バーナード博士の世界最初の心臓移植成功が報道された時は、人類の福祉いよいよ到来と賛嘆かつ感嘆したものであったが、移植後の悲惨な結末が明白にされた今は、このように不条理な心臓移植をなぜ敢行しなければならぬのかと慨歎憂慮、一種の恐怖さえ覚えるのである。

組織細胞のもつ遺伝情報の相違、カドヘリンのもつ型の不同、更に拒絶反応の存在は、心臓移植をいよいよ困難に導くものではなからうか。ある腎移植の講演会で

○教授——側の腎を提供しても残る側の腎は正常の70%は働きます。

聴講者（真剣に）——それでは腎提供者の寿命も70%ということ

になるのでしょうか。

○教授（少々御機嫌斜め）——そういうことは研究しておりません。

治療よりもひたすら移植をのみ意図する内心が窺われないでもない。

心臓移植は、当事者が盛んに宣伝し、且つ熱心に勧誘し熱心に勧奨するほどそんなに有効で、また一般庶民が大騒ぎして期待するほど決してそんなにすばらしくまた決してそんなに有り難い医術であるとは思われない。

人間は互いに他人である。臓器もまた互いに他人である。指紋が同じ人はいない。

（一九八九年八月二十日）

## 『扶氏医戒の略』

阿部昭治

医師であつた父も九十二歳という高齢で今年の正月に他界した。父の遺品の一つとして、私は一枚の額を所蔵している。

これは我が家では昔から床の間の長押（なげし）の上に掲げられており、そこに有るのが当然のこととして受けとめていたから、幼かった私にとっては特に関心を持つような存在ではなかった。この額は所謂昔の字で書かれており、その上可成の長文でもあつたので、青年期を迎えても、私は特に興味も持てずにこれを無視し続けてきたのである。

やがては医師への道を志し始めた私は、とある日、この額の頭書に「醫」の一字があるのに気付き、医者に関係あるものに

違わないと考え、父に質問を投げかけたことを記憶している。うろ覚えではあるが、父の答えの大凡その内容は以下のようなものであつたらう。

江戸時代から累代続く有名な医師の家系があり、この中の一人は徳川將軍家のお抱え医師で、この額を書いたのもこの人であるという。また、この人の子孫の中には東京帝大の医学部教授になつた人もいたということだつた。その時はこれらの人物については多分実名を挙げて説明してくれたと思うがその辺のことは全く覚えていない。

そしてこの額の文章の内容は医師にとつて大変重要な教訓的なものだったので、この東大教授は、自分の先祖が書き残したこの書き付けを複製し、自分の弟子達へ医師の戒めとしてこれを贈つたという。このことを知つた父は羨ましく思い、是非ともこれを手に入れたいと望んだ。

何かの学会の折にでもお逢いできたのであろうか、この教授に直ちにお願ひして之を頂戴することができたという。父もさぞかし嬉しかつたことであらう。

今では考えられないことだが、当時の東京帝国大学医学部教授といえ、王侯の如き存在であつたらうし、東北帝大出の若輩医が、その王侯的教授から念願のものを直接戴いたわけなのだから、感激した父は早速これを表装し座右の銘として、長年座敷に大事に掲げ続けてきたのも、蓋し当然のことと云える。若き青年医師だつた当時の父の感激察するに余りあるといつた処であらう。

時は経ち、父とのこんな会話のことも忘れてしまつたが、父と同じコースを歩んで医師となつた私もやがて故郷室蘭で開業した。今から十五年ほど前になるだろうが、両親も老境に入つたのを機に我が家の離れで俱に生活することになつた。当然のこと乍ら、この額も一緒に我が家に引越してきた。

父が大切にしながら続けてきたものだけに、せめて父の存命中はきちんとしておこうと考えはしたが、私の家では座敷ではなく、一段格下げられて次の間の欄間に掲げられた。

飾つたとはいふものの、特に関心を寄せるでもなく、むしろ放置同然の扱ひだつた。

早いもので、私の母も来春には十三回忌を迎えることになるのだが、当時母の遺品の中から当家に関する多数の古文書を見付け出した。この発見が契機となつて、私が「阿部家三百五十年の歴史」を調査し、上梓してからもう十年にもなる。

この折に、必要に逼られて或る程度古文書も読めるようになった私は、面白半分にこの額を読んでみて驚いた。この額にまつわる父の説明を想い起こし、現在の私の知識でこれを考按してみた。

この額は十九世紀のドイツを代表する内科医フーフェラント氏の名著『経験遺訓』の巻末部の和訳である。又、この訳者は知る人ぞ知る緒方洪庵で、この人は江戸時代の医師としても、蘭学者としても、歴史的に非常に有名な人物であることは衆知の事実である。

この額自体は複製ではあるが、この洪庵が『経験遺訓』の末尾の処を、特に引き出し翻訳し、之を自書したものである。

（洪庵はフーフェラントを扶氏と訳して略記しているので、私も以下これに準ずる）

この扶氏の『経験遺訓』という本の大部分は、後輩医師のために、医学医師の参考となるように、彼が半生に亘る自己の臨床経験を書き綴つたものであり、この部分は医学の進歩と共に、当然変革して然る可き性質のものである。

これに続く巻末部は医師への戒めを述べたもので、我々の遵守すべきモラルを十二章にわたつて説きおこしたものである。こここの処は、今後医学がどんな方向に発達しようとも、古今東西を通

じても、不易の医の倫理と高邁なる医道とを教えたものである。この十二章に、洪庵ほどの大蘭学者、名医師でも痛く痛く感激したのだろう。特に肝に銘ずべき金言としてこれを『扶氏遺戒の略』と名付けて、自ら書き残した物がこの額である。

この最後の処には次のような注釈をつけ、自他共に守る可き人生訓であると書き加えている。

右件十二章ハ扶氏遺訓卷末ニ附する

所の醫戒の概要を抄譯せるなり 書し

て二三子に示し亦以て自警と言ふ

安政十己正月 公 裁 誌

さて、或る程度の年配の医師であれば、学生時代から必携の伴侶とも言われた西川義方著の『内科診療の実際』という医書をご存知の筈である。この本の前後の見開きの処に『緒方洪庵翁抄訳フ氏医戒』としてこの巻末の十二章、額についていえば『扶氏遺戒の略』が載っている。

このことを後日になって知ったわけであるが、若し最初から判っておれば、この額の解説にはあれ程の苦勞は不要であつたらう。併し、私の努力も総てが徒勞ではなかつた。

この額と医書の訳の両者を較べてみると、全く同一の文章ではなく額の方には可成り朱や墨で加筆された処がある。このことは何を意味するものだろうか。

私は、額の方は或は洪庵の原稿ではないかと推測した。原稿となると、好事家にとって一層貴重なものとなるのである。併し、この両者は原本も同じ、訳者も同じであるから、内容的には殆ど一致しているのが当然である。その上、この訳文は可成の長文であるので、額の解説文の全体をここに載せることは避けて、西川

博士の著書をご一読戴きたい。この両者を特に比較検討を加えたいと興味をお持ちの方には、そのコピーを差し上げることにしてその責を免れたい。

ここで大方の諸賢には、父が惠贈を受けたという東大教授の芳名はもう頭の中に想い浮かばれたことであろう。洪庵の孫にあたる緒方知三郎博士その人である。教授は病理学の權威であることは勿論のこと唾液腺ホルモン・パロチンのご研究でも特に有名な方である。

ここで額の由来について要約してみる。

十九世紀ドイツ医学の指導的内科医の扶氏の大著『経験遺訓』を緒方洪庵が翻訳し、特に最後の処を『扶氏遺戒の略』として書き残した。

洪庵の孫の知三郎教授がこれを複製して弟子達に与えた。この中の一枚を、父が頂戴して自らの人生訓として座敷に掲げておいた。これが今日私の手許にあるわけである。

医の倫理とか、ホスピスと云ったようなことが喧伝される最近の世にあつて、この『扶氏遺戒の略』の内容は誠に時宜を得たものと考えるのである。これは我々医師にとって必須の知識、教養、教訓であろう。西川博士の著書を是非とも再び緋いて戴きたい。ここで扶氏と洪庵の横顔を紹介する。

扶氏 Christoph Wilhelm Hufeland (1762—1836)

十九世紀ドイツの代表的内科学者。ランゲンザルツに生まる。一七八〇年イエーナ大学に入って医学を修め、後に、ゲッチンゲン大学に転じ、八三年卒。直ちにヴァイマルに帰り実地診療に従う。ゲーテ、シラーを患者にもち、親交があつた。九三年イエーナ大学教授として招かれた。一八〇〇年プロイセン宮廷医兼シヤリテー病院院長としてベルリンに赴任した。宮廷の信任厚く、

三〇年以上もその職にあった。一〇年ベルリン大学創立に尽力し内科学教授となった。又、内科及び外科学会の創立を首唱した。一八二六年『エンケイリドン・メデイウム (Encheiridion Medicum)』を著し、自らの五〇年間にわたる診療経験を公にした。これが『経験遺訓』でこの巻末部が「扶氏遺戒の略」である。

緒方洪庵 (1810-1863)

江戸末期の蘭学者、医家。名は章、字は公裁、洪庵と号した。備中の人。十七才の時、医学を志し大阪に出て中天遊の門に入る。二十一才の時江戸に赴き、坪井信道、宇田川玄真らについて蘭学を学ぶ。

一八三六年(天保七)長崎に行き、オランダ医ニーマンに従って研鑽し、一八三八年大阪に帰り、開業し診療と種痘の普及に努めた。傍ら蘭学塾適々齋塾(適塾)を起こし、多くの人材を育てた。明治年間に活躍した人々の中には、適塾出身者が多く、村田蔵六(後の大村益次郎)、福沢諭吉、長与専齊らを輩出した。又、佐野常民、橋本左内、大島圭介らもこの塾に学んだ。

傍ら、『病学通論』、コレラの対策書『虎狼痢治準』、扶氏の著書の訳『扶氏経験遺訓』などの訳著を公にし、西洋医学の普及に努めた。一八六二年(文久二)江戸幕府の奥医師兼西洋医学頭取となった。

蛇足ではあるが、洪庵のひ孫即ち知三郎博士のご子息緒方富雄博士も親子二代に亘る東大医学部教授で血清学の分野で活躍され、殊に梅毒の血清反応の緒方氏法の発見者として我々にとって馴染み深いお名前である。他方、曾祖父洪庵の研究者としても有名な方であったが、この三月に他界された。

更に、蛇足の又蛇足として最後に次のことを書き添えたい。この額は既述の如くコピーである。若し真筆ならば大変な価値

があるものであろう。併し、コピーと雖も、我が家に来てからも半世紀を優に越える。従ってそれなりに箔がつき、価値は増してきているのではないだろうか。特に医家にとつては、その内容から考えても可成りの値打ものであろうと自負している。

我が家でも長男は既に医師となり、今の処は三代目に亘った医家といえる。従って我が家にとつてもこれは秘蔵に値する大事な品である。併し、長男のように、旧漢字、旧仮名遣いを知らない世代の若者には、このような額を読解することは殆ど不可能に近い。加えて、長男が何時の日か建てるであろう兎小屋にとつては無用の長物として邪魔物扱いされ、次の孫の時代には廃棄の憂目に逢うことは確かである。

父も私も室蘭医師会には長い間お世話になってきた。従って、父が大切にしてきた額でもあり、私にとつても意義のあるものではあるが、額の内容性格から考えて、私はこれを医師会に寄贈するのが最も適当であり、地下の父もきつと喜ぶに違いないと思う。古いものであり、汚れ破損もあるが、手を加えて新たに表装でもし直し、会長室など適当な処に掲げて戴きたい。会長以下会員各位が、この医戒の心を心として、互いに日常診療に励むならば、私が死蔵するよりも何倍も世に裨益する処となるのではないかと考えます。

不肖私も本年から医師会の監事に選任されたのを機に、自省自戒の意をもこめて、これを謹呈したいと考えます。私の意のある処をお汲み取り下されて、よろしければ御受納戴きたい。

# 閑吟風流抄

— 室町小歌 —

加藤 治良

あまり言葉のかけたさに  
あれ見さいなう 空行く雲の速さよ

なんのへんてつもない風景に、時を経て、おやと思うほど惹かれることがある。その時、そのままにやり過していた人のこころ、言葉にも、なにかの折にふと足を止め、やわらかく反芻してみることがある。この小さな歌もそんな味をもっている。

『閑吟集』が世に出たのは一五一八年（永正一五年）室町時代後期、あの『梁塵秘抄』から三百五十年たっている。

柴屋軒宗長（さいおくけんそうちよう）という連歌師を編者とする説もあるが、異説をたてる人もあり決着をみていない。小歌二二一、大和歌四八、近江節二、田楽節一〇、吟詩句七、早歌八、放下歌三、狂言小歌二、しめて三百一首が連歌形式をとって集められた歌謡集で、中世歌謡あるいは室町小歌と称される。

公卿や女官、女房たちの宴席でのくつろぎ歌、それが遊女、白拍子、傀儡（くぐつ）師たちによって広まって行くのだが、狭義の小歌二百三十一首の殆どが恋歌、艶歌、風流歌である。男の心の情がすなおに流れ、万葉集の東歌を連想させもするが、室町の世ともなれば流石しゃれている。相当きわどいものでも風流の磨きがある。きれいだ。

宗安、隆達の小歌へと継承され、安土・桃山時代から江戸歌謡へと流れるのだが、現代の露骨さ、当世の情緒不毛、うす汚れた日本ことばの墮落をあらためて思い知らされる。

いくつか抜き出して並べてみよう。解説、注釈も煩わしいだけで不要だが、小生なりの蛇足を一行。

「閑吟」とは心静かに口ずさみ吟ずることだという。

一 花の錦の下紐は 解けてなかなかよしなや

柳の糸の乱れ心

いつ忘れうぞ 寝乱れ髪のおもかげ

・あとの心はかえって詮なきものよ。

一四 吉野川の花筏 浮かれてこがれ候よの

浮かれてこがれ候よの

三二 新茶の若立（わかだち）

摘みつ摘まれつ 引いつ振られつ

それこそ若い時の花かよなう

・ 抓ったり抓られたり、袖を引いたり

振られたり、戯れての二人。

三三 新茶の茶壺よなう 入れての後は

こちや知らぬ こちや知らぬ

・ 男とは、そんなものよの。

三四 柳の陰にお待ちあれ

人間はばなう 揚枝木伐るとおしあれ

・言訳のあれこれ、恋の知恵。

五五 何せうぞ 燻んで 一期は夢よ ただ狂へ

・まじめは捨てて遊び一筋。

五九 わが恋は 水に燃えたつ螢々

もの言はで笑止の螢

・忍ぶ恋、それとも片想い。

七二 恋風が 来ては袂にかいもとれてなう

袖の重さよ 恋風は重いものかな

・そよと吹き、袂にまといつくその重さ。

八五 思ひ出すとは 忘るるか

思ひ出さずや 忘れねば

・思ひ出すとは忘るるゆえよ

思ひ出さぬよ忘れねば (弄齊)

八八 思へど思はぬふりをして しゃつとしておりやるこそ

底は深けれ

一三一 人買ひ舟は沖を漕ぐ とても売らるる身を

ただ静かに漕げよ 船頭殿

・西か東か、鞆之津か。

一三六 月は傾く泊り舟 鐘は聞こえて里近し

枕を並べて お取梶や面梶にさしませて

袖を夜霧に濡れてさす

・腕を交わしあい、揺られての共寝。

一五六 奥山の朴(ほお)の木よなう

一度は鞆になしまらしよ 一度は鞆になしまらしよ

・おれが刃は、これよ、これよ。

一五七 ふてて一度は言うてみる 嫌ならば

われもただそれを限りに

・よほどのことに、言つてやろうか。

一六五 一夜馴れたが 名残惜しさに

出て見たれば 奥中(おきななか)に

舟の速さよ 霧の深さよ

一八〇 来る来る来るとは 枕こそ知れ

なう枕

もの言はうには 勝事(しょうじ)の枕

・睦言を知っているのは、枕よお前だけ  
人の耳に入れたら、ただじゃおかない。

二三三 申したやなう 申したやなう  
身が身であろうには 申したやなう

・人並みの身なら、うち明けもしように。

二三五 あまり言葉のかけたさに  
あれ見さいなう 空行く雲の速さよ

・あれもこれも胸にあふれて、だが  
へんてつもない言葉。

二四四 嫌申すやは

ただただ打て 柴垣に押し寄せて  
その夜は夜もすがら 現なや

二四九 降れ降れ雪よ 宵に通ひし道の見ゆるに

・あなたの足跡が消えるまで。

二七四 今結た髪が はらりと解けた  
いかさま心も 誰そに解けた

二七七 待てども夕の重なるは 変はる初めか おぼつかない

二八二 あまり見たさに そと隠れて走(はし)て来た

まづ放さいなう 放してものを言はさいなう  
そぞろいとほしうて 何とせうぞなう

二八七 人の辛くは われも心の変はれかし  
憎むに いとほしいは あんはちや

・嫌いにならないものかしら、あの人を、  
わたしだけが、あほらしい。

二九九 ここはどこ 石原峠の坂の下

足痛やなう  
駄賃馬に乗りたやなう 殿なう

三〇〇 花籠に月を入れて

漏らさじ これを  
漏らさじと  
持つが大事な

・花籠と月と——なんともきれいな言葉。

三一一 籠がな 籠がな

浮き名漏らさぬ籠がな なう

あえて色模様の濃い二七首を選んでみた。  
言葉のきれいさと韻のおもしろさ、  
だから卑しくない、べとつかない。  
いくなれば「マドリガル」だ。

## 『聴くくすり』

安斎哲郎

音楽放談も数次を超すと、アレ、この男  
本当にお医者もやっているのかしら、など  
と思われても困るし、ならば医者のお端くれ  
としての本姿に立ち戻って、今回は音楽療  
法といこう。某週刊誌に「読むくすり」と  
いうコラムがあるのを真似た表題はかよう  
なイキサツであって、「効く薬」の誤植で  
はない。

僕の音楽狂ぶりは周知だし、一方医者として  
は心身医学にも多少とも首をつっこんで  
いることも周知だから、音楽療法推進派  
の人々の中には「北海道の音楽療法を育て  
るのはお前しかない」などとオダテる人  
もいるのだが、いかに自称マルチ人間の僕  
といえども、今のところそこまでは手が回  
らないし、情熱も湧いてくるわけではない。  
しかし、食わず嫌いで枯券に関わるとば  
かり文献を読み漁る気になるところは、マ  
ルチ人間を自称する所以と思召されたい。

音楽療法のハシリはイスラエル第一代の  
王サウルのうつ病をハーブの演奏で全治さ  
せたダビデ（旧約聖書）ということになっ  
ている。古代ギリシャでは、神殿兼病院で  
あるアスクレピアードスで薬物療法、小外  
科、催眠療法などと並んでクロス（合唱団）  
による音楽療法が行われていて、その効用  
についてアリストテレスは「詩学」の中で  
カタルシスという理論を展開している。こ  
の語をフロイトが医学の世界に復活させた  
ことはご存じであろう、というような音楽  
療法の歴史やら理論の展開やら、僕の頭  
中にもだいたい詰まっているのだが、根がケ  
チだから減多にひとは教えられない、と  
いう訳ではないが、ここで大論文や総説を  
展開しても始まらないから、もっぱら実用  
的な、音楽によるストレス解消法、あるい  
は音楽によるイライラの癒し方、悲しみを  
乗り越えるための音楽活用法、不眠症の音楽  
療法といった、明日から役立つ音楽観賞療  
法のコツを伝授するにとどめたい、とは思  
っているが、脱線自在な僕の筆のことゆえ、  
結果がどうなるか、保証の限りではない。  
欧米諸国ではPT・OT・STと並んで  
音楽療法士（MT）が立派な市民権をもつ  
て久しいのだが、先進国の中では日本がこ  
の点では優に三十年は遅れていて、という  
よりほとんど無に等しくて、それだけに生

半可な自称音楽療法家がはびこることにな  
る。近頃「頭のよくなる音楽観賞法」だの  
「音楽でストレスを解消しよう」といった  
類のハウツーもののペーパーバックが出回  
っているが、その内容にはかなりいい加減  
なものもあるようだからご用心が肝要だ。  
音楽療法には大きく分けて二派があつて、  
一つは観賞派ともいうべきもの、つまり病  
態ごとに処方を含めて音楽を聴かせること  
によって病気を癒そうというもの、もう一  
つは行動療法派ともいうべきもので、患者  
に合唱させたり、楽器を持たせて合奏させ  
たりしながら、レクリエーション療法を兼  
ねて治療しようというもので、現在世界の  
音楽療法の趨勢は後者に偏つていて、観賞  
派の方は邪道扱いされかねないほど、両者  
の間には深刻な対立があるのだそうだ。む  
ろん観賞派だって決して邪道と言うには当  
らないもので、産科医や歯科医が（ダジャ  
レにあらず）BGMで分娩や抜歯の痛みを  
中和しようとするのも広義の音楽療法と言  
えるのだが、BGMも選曲や音量の設定を  
誤るとただの雑音よりもつと始末が悪いこ  
とだつてある。

サルよりは僅かに毛髪が三本だけ多く、  
しかもチンパンジーと知能指数がほとんど  
大差ない脊椎動物でありながら、人間の日  
常生活は競争社会のストレスに満ちていて、

そのストレスは専ら左脳ストレスだから、左脳を休めるには音楽によって右脳を適宜に刺激するのがよい、というのが音楽療法の基本理念である。要するにロゴス的な左脳に休暇を与えて、パトス的な右脳をマッサージするのだ。いま学校教育は受験教育、就職教育で、論理を教え、それを暗記させ、ヒラメキなどは暗記の邪魔にこそなれ決してプラスにならぬと教えているではないか。また職場でも成功の鍵は全く同じで、日夜左脳ばかりをコキ使っているではないか。左脳ストレスに敗れた心身症患者という程ではなくとも、左脳を休め、人間的なバランスを回復させるには右脳を刺激すればよいのは自明の理だ。患者や従業員（や奥様）との対人ストレス、税金ストレス、レセ査定ストレス、忙しき、その他、医師といえども日常ストレスには事欠かないから、つい夜ともなれば巷に迷い出てカラオケで一杯、となるのは人情だが、チョットお待ちあれ、アルコールはストレッサーですよ。うさを払う玉簪などというのは実は迷信ですよ。まあそれには目をつぶるとしても、脳波学的研究によれば、日本人にとつてカラオケも邦楽も音楽ではなくて、文学なのだそうである。つまり、音楽なら音楽脳である右脳で認知している筈なのに、日本人はチントンシャンも演歌も左脳で、つまり

文学として聴いているのだという。芸術療法という立場で趣味道楽を考えると、演劇、映画、文学（作詩作歌、俳句・川柳・都々逸などを含む）は左脳的という点では問題があると見える。では絵画・工芸・園芸の類はどうだろう。たしかに右脳的だが、孤独でもできる作業だから対人交流の障害の回復には不向きだ。ユンク分析心理学派の箱庭療法というのが、これは箱庭を媒体として治療者と患者との非言語的コミユニケーションを図ろうとする方が主目的で、厳密な意味での芸術療法とはイマイチ違う。音楽には美術工芸にはない時間的秩序というものがあるから、觀賞だけでも演奏者あるいは作曲者との交流が体験できるし、まして演奏行為は「定められた時間秩序の中で非言語的な共通の目標に向ってする協同作業」だから、社会心理学的ストレスで最も傷つき易い対人交流の回復にはもってこいなのである。我田引水と思われる恐れがあるが、これには臨床的、脳波学的に立派な根拠があるのだ。

ポドルスキーという人がいて、膨大な疾病、患別音楽処方集を発表している。うつ病、不安神経症、神経性胃炎、高血圧、糖尿病などなど、それぞれに十曲内外の曲名を並べて、毎晩寝る前に二時間これを聴かせるという觀賞派音楽療法家である。これ

は参考になりそうだと思うのだが、音楽に關してはかなりのモノシリを自認する僕でも一度も聴いたことがない曲が沢山含まれているから、自信をもってお勧めする訳にはゆかぬ。前述ハウツーもののペーパーバックは大部分これの真似または剽窃である上に、某レコード会社の宣伝用に違いないものまで、定価金一千三百円なりで売られている。悲しみを癒す音楽、落ち込んだ時の音楽、うつ状態から抜け出す音楽と言った具合である。素人が考えると、落ち込んだ時、うつの時にはリズムのはっきりした、景気の良い音楽を聴けばよさそうだが、それは間違いで、「同質の原理」（アルトシユラー）という原則があり、悲しい時は悲しい曲を、暗い時は暗い曲を、不安な時は不安をかき立てるような曲をまず聴くべきで、そのあと次第に明るい曲、元気が出る曲に変えてゆくのだそう。異質の音楽は排除を受けて、間脳・下垂体・自律神経系に対して好ましからざる反応を示すことが生理学的に証明されるのだという。われわれの日常診療で、うつ病患者のメンテラに叱咤激励は禁物というのは常識だが、それと同じようなものだと思います。間違い。

中学高校生を中心にナガラ族というのが流行で、深夜放送でDJを聴かないと勉強

がはかどらないし、電車の中でウォークマンを絶えずシャカシャカ鳴らしているのはサラリーマンにも少くないのだが、これは問題だ。第一、DJのシャベリは左脳で聴いている筈だし、大きすぎる音量、リズムマシンによるあまりに機械的で変化のないドラムのリズムは右脳マッサージを超えて破壊的暴力的だ。この頃流行のシンセサイザーの人工電子音は神経を疲労させこそすれ、安らぎをもたらす証拠はないという実験結果も出ている。だから音楽療法はクラシックに限るというのが世界の趨勢なのだが、ここがなかなか理解して貰えない。さっきの「同質の原理」を引用すれば日本人にとってあらゆるクラシック音楽が異質なのだという議論がある。だが、これは従来の学校教育に罪があるのだ。右脳芸術の代表というべき音楽でさえ、学校の教科となると左脳教育に化ける。強制的暗記、分析、教えられる通りの歌唱、排他的競争、マルチヨイ式試験はまさにすべて左脳的で、これでは音楽が好きになれる筈がない。だから音楽が「わかる」には何か特別の才能が必要で、自分にはそれが無いから洋楽は好きになれない、と思ひ込んでしまうのだ。「よくわからないけど素敵を演奏会でした」という素朴な感想こそ本当の音楽観賞であるべきだのに。そこで、この拒絶反応を脱

感作するために、胎児が母の胎内で血管音のリズムに乗った静かな音楽を聴いているつもりで、虚心淡懐に音楽を聴いてみよう。たとえば、不安の解消にはベートーヴェンは第九交響曲の冒頭のような、いかにも不安をかき立てるような雰囲気から始まる曲がよい。落ち込んだ時ならチャイコフスキーやシベリウスがよい。ブラームスもよいが間違つてもブルックナーのような、突如ラッパが鳴り響くようなものは避けるべきだ。悲しみを癒したいなら、フォーレやモツァルトのレクイエムに勝る曲はない。ムシヤクシヤするならストラヴィンスキーの「春の祭典」のようなバーバリズムの音楽が最高だ。ただし、如何なる場合にも音量を適度に絞つて、解説やら批評やらのあらゆる左脳的要素を黙殺して聴くともなしに聴くのでなければ、ナガラ族の優等生にはなれません。この頃ビデオディスクなるものが出現し、僕はケチでまだ買わないが、新しいものがお好きな先生方はもうお持ちの方も多いだろうが、これでは耳も目も奪われるから、ナガラ族になる資格はなからう。全神経を集中して音楽を聴くのは切符に大金を投じて演奏会に行ったときとか、珍奇なる外来演奏家という異種動物を観察してやろうというコンタンの時はよいが、音楽療法としてはこれは邪道で、読書しナ

ガラ、居眠りしナガラ、あるいは酒を飲みナガラというのこそ音楽療法式観賞法の奥義である。読書は左脳の作業ではないかと言ふなかれ、右脳マッサージと同時に左脳作業をするのは能率的だし、これがストレスにはならないところがBGMの不思議なところだ。この極意を体得すれば音楽が明日への活力という能書きは万全だし、我が子の胎教には手遅れだが、お孫さんには今からでも遅くない。なんでも五カ月を過ぎた胎児なら、母親が茶碗洗いで手を滑らせてガチャンとやるたびに胎内でピクツとするそうではないか。たしかに胎児は音を聴いているのだ。胎教とはこのことに違いない。あまりリズムの強烈でない、おだやかで明るい曲がよからう。モツァルトの大抵の曲、パロツクのほとんどすべての曲なら胎教に良いこと受けあいだ。少しく長じてからの勉強にもナガラ勉強の効果あること、かく申す僕を見たまえ、というと自信過剰で響感を買ひそうだから、これは内緒に留めておく。聞き流して戴きたい。

# 編集屋座談会 十年一流れ

上田・大岩・大久保・小國・加藤  
兎玉・澤山・高島・三村・村井  
青木・大島・高橋

平成元年7月13日 於“四季の味”



加藤 「波久鳥」が誕生して十年が経ちました。編集員の私達も自動的に十歳加算されたわけですが、創刊以来の全員つつがなく、これも素晴らしいことです。

今日は海霧ですが大雨の日もありました。非常に蒸し暑い夜もありました。雪の日だけはおそらくないでしょうが。

大久保先生にレールをつないで頂いて、きびしい反省を混えながら、ざつくばらんに、楽しい話題のあれこれで一夕を過ごしてまいりたいと存じます。

## 瓢箪から駒

大久保 小國先生が遥か稚内からお出でいただいて創刊号からの編集委員がまず全員揃うことになり、こんな嬉しい事はありません。上田会長はいづれ見えられますが、手順として過去から始めたいと思います。初代委員の大岩先生から、ひとつ。

大岩 創刊号は昭和五十五年だったね。

高島 誰が言い出したの？

大岩 長田先生なの。創刊号にも書いているけど、その辺の話をするとね——親交会は元老の先生が四、五人でやっていたの。トップ役の長田先生は雑誌の生まれの一年か二年前に内地に行かれたんだけど、送別会の席で（おい、大岩ちよっと来い）と呼

ばれて、やり残した事がある、機関誌を作  
りたかったんだが、そこまで手がのびなか  
った、ぜひ実現してほしい。そう言われ  
ただけで僕はそっちの方は全くわからん。  
皆に相談してね、まあ、やってみるか、と  
いうことになって上田、小國、加藤とい  
つた先生方が声を出されて発足したわけ。

(ここで、小國先生による乾杯)

大岩 酔わないうちに話しておくけど、  
度その頃は先輩の元老先生から次の世代に  
バトンタッチの時期で新しい気運も生まれ  
いいチャンスだったんだ。

でもね、医者なんてのは技術のエキス  
パートだから、この方面はどうなんだろ  
うと心配していたんだが、いざやってみたら  
まあ、才能屋がいること、いること。俺は  
びっくりしました。(笑)

大久保 創刊号の編集後記に上田先生が瓢  
箆から出た駒という書き方をされてます。  
名称は委員ではなく編集同人で上田、大岩、  
大久保、小國、加藤、高島、三村、村井の  
諸先生でした。写真を見ますと昔の医師会  
館の奥座敷で、テーブルの上には何ものっ  
てません。弁当も出ず、空茶だけの編集会  
議でしたね。

高島 雑誌の名前は誰がつけたの？

加藤 長田先生。白い鳥の「はくちよう」  
でした。

大岩 予算が全く無かったんで、金をどう  
するかが問題。今回だけは商社、薬屋さん  
に手伝ってもらおうということで、薬屋さ  
んと自動車屋さんを回って金集めをしまし  
てね、それで出来上がったの。

なにせ年度途中の話だから委員会も予算  
もない。五十六年に規約改正して委員会を  
作り予算も出来、ようやく認知を受けたと  
いうわけ。(笑)

三村 創刊号はいくらで出来たんですか。

大岩 三十二、三万だったよね。

加藤 室蘭印刷の幸松さんとの話で頁八千  
円ぐらい、今で一万円弱でしょう。あまり  
上がっていませんよ。ただ四万、五万の額  
が感じとして大きかった、当時はね。

大久保 青木さんには創刊から去年の九号  
までいろいろタッチしてもらったんですが、  
初めの頃の強い思い出ありますか？

青木 ええ、広告集めに苦勞された大岩先  
生の後ろ姿が浮んできます。(笑)

高島 十年間よくやってこれたのは何だっ  
たらうと考えていたんだけど、医師会じゃ  
なく親交会の雑誌として編集できる、それ  
がスムーズにいった原因でしょうね。それ  
と僕の印象では加藤先生。最初、表紙がな  
かなか決まらなかったんだけど、先生が何  
枚か描いて持ってきたでしょう。いやいや  
これは、と思った。

加藤 あれはね、体裁悪かったんだけど、  
まあ好きなことだったし、割付けも我流で  
綴じてみて、見本のつもりだったの。そう  
したら御採用になっちゃって……まあ私の  
ならただで済むから。(笑)でも、白い鳥  
を波久鳥とひねってみたり、ほいほい調子  
に乗り過ぎちゃって、反省しきり。

私ね、創刊号の編集のとき驚いたのは、  
小國先生が壁に寄りかかりながら手にした  
原稿をね、その場で校正しながらすいすい  
清書するんです。すごいなあ、とあきれて  
しまったんです。

大岩 先生、たしかに加藤色は出ましたよ。  
でも絶対悪い方向ではないから。

### 三号をこえて

大久保 加藤先生、これは続きそうだと感  
じられるのは何時ごろから？

加藤 三号過ぎてから。

三村 委員の入れ替えは五年ぐらい後でし  
たか。

大岩 いや、あれは三号誌を終ってから。  
実は私が撤退のチャンスをうかがっていた  
んだ。それで三号のあと何人かの先生と一  
緒に抜けたの。

大久保 上田、大岩、小國、高島先生のあ  
とに澤山、兎玉、遠藤(秀)、神島(章)

先生が入られたんです。

大岩 三号で終りにしない、これを固く誓って発足したんだが、私ははっきり知らなかったがピンチらしい気配もまあ、あつたらしいね、原稿がなかなか集まらなくて。

大久保 そうですね。親交会について残しておきたいことは長老、先輩の先生方にほぼ語り尽くしてもらいました。行事、会員名簿も青木さんがまとめてくれましたし、記録の面はまず出来上がったわけで親交会のフェルラウフはどなたもつかめる様になった、と思います。そこで三号から五号にかけてが『波久鳥』のスタイルを造ろうという過渡の時期だったんですね。

加藤 三号過ぎまでは「忍ぶ草」「旧友通信」「わが青春」などの核があつたけど、いつまでも続くわけじゃなし、新しい絵と古い絵とのバランスを考える必要がね。

大岩 いつまで古い話やってるんだ、そんな声も出て来たんだ。

大久保 親交会発足当時の会員の意図や会の性格は今の人達が理解しているものとは違っていましたから、十年の間にそれを記録に留めておくことは大切なテーマだったんです。

その仕事がほぼ終わった七号あたりから、自発的なユニークな投稿が目立つようになって、雑誌のスタイルも見えて来ましてね、

ああ続くな、と感じたんです。

三村 春が来てマスタープランを立てて、出来上がるのが十一月、あつと言う間の一年間ですが、かなり凝縮されたものが出来ていると思います。時々開いてみて内容の流れを感じます。

新しい若い人たちの投稿に対する不安も無い訳じゃないけど、何人かに（先生方が原稿出してくれないと続きませんよ）と言いましたら、絶対に出しますよ、と返って来たんで安心してはいるんですがね。

大岩 他の医師会では会報と混みになっていくけど、うちは別々、これがいい。構造が違うんだ。

加藤 うちの場合、作りやすいことは確かですよ。学説、レポートがないから硬軟の開きが大きくない。身内の肌の匂いというか息づかいの聞こえる文章が並ぶ、そんな雑誌ですね。まとめ易い。問題はこれからかもしれない、安保闘争の時代に入るから。

児玉 吊し上げられますよ。（笑）

大岩 あ、大島さん。この委員会はね人使い荒くてひどいよ。かなり無理な注文あると思うけど、よろしく頼みますよ。（笑）

大久保 私思うんですけど、皆さんにお願いでしてても人それぞれ得手不得手があるでしょう。嫌だ、という方には無理にお願

いできない。それで同じ方に続いて出ていただく事もありましたが、そのお蔭で続いた訳です。たとえば北原先生が小雲水のペンネームで書いてくれましたね。

児玉 「ちよつと古いお話」

大久保 久安先生のゴルフとか連載物が出てきたから『波久鳥』の継続性もかなり安定してきたわけです。いまは安齋先生、加藤先生に書いていただいているので本の筋というか、それがきまりましたでしょう。だから数が集まれば楽だったんです。これまではね。

加藤 書いてくれる方が居られたら古い方もどんどんお願いしたい。新しい人が二人とそ中で増えて行く、自然の流れですね。変わらないようじゃ変わって行く、親交会の顔付きってそうじゃないですか。

児玉 若い世代が少ないから、なかなか目立った若返りができない。

大岩 あんまりスパツと変わっても馴染みが消える、それも困るなあ。

高島 このまま続けていいんじゃない。

加藤 何年前か、ある先生に言われたことがあるんです。思い切って冒険してみませんか、横書きでもいいんじゃないかって。

編集者が変わって冒険してみれば或るいは、でもガラツとは変らない、どこかに今迄の匂い、柄を引きずってしまう、だから程良

い新味が出るかもしれない。

小國 いやあ、たしかにそんなに変わるものじゃないですよ。冒険して良くなるものでもなし。

横書きか縦書きかは初めにも議論しましたね。でも雑誌の性格からは縦書きですね。

## マル秘・座談会テープ

加藤 この会誌にも詩歌、俳句がのっているんですよ。紙面をうまくアレンジしてくれるんです。長田、皆川先生の短歌、大久保お父さん、曾根先生の俳句が消えてからは全く出てこないんです。詩歌俳句の載らない機関誌はちよつと珍しい。

小國 そうですね。

大久保 それで今回出るわけですね、室町小歌が。

加藤 あれはね、誌面の構図の問題もあってね、散文の文字だけじゃ硬いから……それと、私だつて二段物を書いてみたいし。

大岩 大久保先生あんな親父さんの弟子じゃないの？俳句のさ。

大久保 駄目々々、わたし独立したんだも。大岩 漫画がまだ出てこないな。四コマがあつてもいいと思うんだが。

小國 今の漫画ちよつと違うんじゃない？加藤 一口に漫画といつても今は、劇画に

漫画、イラスト、コミックなどのジャンルに分類されて賑やかですね。

児玉 喋るのはいい、書くのは嫌だ、記録に残るからつて言う人がいるんだけど、記録に残つてそんなに怖い事があるんだろうかな……。ねえ村井先生、今度書くんですよう？

小國 ムーさんは聞いてて書かせるとうまいですよ。そしてたまに喋ると実にどぎつい事言うんだ。(笑)

加藤 三村先生の宿題は残つてるんですよ、まだ。ねえ、大久保先生。

三村 宿題つて？今回の？

大久保 ざーっと前からのさ。でも無理に催促しない方がいいと思つて、ね。

三村 宿題？あーあれ？

大久保 うん、あれさ。(笑)

小國 大岩先生は書いても喋つてもうまいじゃない。会報にしよつちゅう……。

大岩 喋るのはまあ、書くのは全然駄目なんだ。みんなの文章読むたびにすごい劣等感持つんだ。

大久保 台湾旅行の話なんか楽しいよ、面白いよ。

大岩 そうだろうか。小説つて読んだことないんだ。本棚は全部ノンフィクションばかり、うん。フィクションはどうやつて書いていいかわからないんだ。

小國 先生は直木賞ではない。(笑)

三村 座談会は好評ですね。目玉になりましたね。

大久保 浜町の赤い灯・青い灯から始まつたんですけど、上田先生のテーマだね。

呑兵衛たちの良き時代のお話ですよ。蘭東は中島町の侍達でした。ここ二、三年からは現実的というかだいたい複雑になってきました。

児玉 それもいいですね。

大岩 おれも出たけど、後から、いやあーあんなこと喋らんけりやよかつたつてさ、うん。でも加藤先生がうまくネ、恥かかないように何してくれるからね、うん。

全部出されたら女房子供に逆らえない人出るもん。(笑)

加藤 最初の浜町の時だけ断り書きをつけたの。耳から文字への関係上ニユアンスに多少の違いは生じますから悪しからず、とね。その後は一切お断りしてないの。

「文責在加藤」と書きかけてやめちゃった。責任とりたくないもんね。(笑)

高島 中島町の赤い灯は本庄先生が親方やつてくれたの、張り切つてね。楽しかったなあ。

三村 苦労されるんでしょう。

加藤 テープ聞きながらザラ紙にまず、荒書きしていくんだけど、それが楽しいの。

三日徹夜しても疲れないうですよ。(笑)  
三村 東室蘭のときは六時半から十時過ぎても終りませんでしたね。

先生、座談会のテープはマル秘扱いでしたよね……まだ、あるんですか？

加藤 全巻たいせつに保管していたんですがね、残念ながら消すことにしました。

青木さん、消してくれました？

青木 いえ、まだ終ってません。(笑)

加藤 でもね、マル秘だなんて鍵かけておく程のものじゃないですよ。まあ、家庭の事情によつてはどうか。(笑)

三村 「奇人変人」も面白かった。あとでおこられましたけど。でも、あの人たちは皆さん自覚してますから。(笑)

大久保 米沢先生が面白い話を普通に話してくれました。普通に話すと余計に奇人らしくなるんですね。(笑)

先生、どうですか、司会の苦勞話。

加藤 特にないですよ。やはり文字にする場合ですね。耳に聞いた通りのニュアンスまで活字は伝えてくれない、どぎつくなったり、下手すると右が左になり兼ねない。大岩先生の例で説明しますとね、中島町のバーで隣に座っている女の子の手を握ったんです。(大岩「ーえ？いつ」)握ったの！(笑)すると彼女がね、アラ大岩先生だ、ワタシ知ってるうー。先生はサーツと手を

引いた。(笑)学校時代の校医先生だったんです。

この「手を握った」は、さらっと軽い調子です。聞いている人達は、もののはずみかホステス君へのエチケツトなんだろうと理解しますから、どうって事はない。もしも、なまじの配慮から「握ろうとしたら」では却って生々しい、いやらしいでしょう。(笑)だからここは先生の語るままに手を握らせた方がいい。(笑)彼女が先生の手を握るのが一番無難だけど、それじゃ嘘になる。(笑)

大岩 ふーむ、いやいやあ、そこまで考えてくれるとは。だいぶ感謝せんといかんなあー。(笑)

児玉 今度から褒美出したらどうだろう。たとえば六号から十号までの中から選んで優秀作に会長賞あげる、なんて。

大久保 また児玉先生持つていくんじゃないの。懸賞かかると絶対、先生なんだ。大雪の時も、その前の時もそう。(笑)

## 『波久鳥』ある限り

大久保 十一号から考えてみたい、変えてみたい事が幾つかあるんです。活字の大きさ、紙の質、横書きは寝て読むのに便利という方もいます。それからどうでしょうね、

そろそろメンバーの交替も。こないだ室蘭印刷さんに、先生まだやってんの、って言われちゃった。

小國 ぼく部外者として眺めてますけどね、あまりガラツと変えても困るんじゃない。やる人を特別育てているのなら別だけど。

加藤 活字の大きさ、行間は考えなきゃ駄目ですね。それと創刊以来凸版でやってきたのは、難しい漢字を使われる先生が多かったためで、これからは第一水準の漢字だけで結構でしょう。紙質とあわせて写植かどうか、の問題。

三村 カラーを入れたいですね。

加藤 そう、竹内先生の花の寄せ描き、表紙にいいですよ。でもカラーじゃないとね。高田先生の測量山だって黒白ではお気の毒です。

(ここで、上田会長見えられる)  
上田 今、解散してね。途中で抜けるに抜けれなくて。

(ひとしきり、あれこれ話はずんで)  
加藤 十一号を迎える節目で何かアドバイスありませんか、生みの親でもある先生として。編集委員に若い人を入れたら、という意見もあるんですが。

大久保 いますよ、有能な若い人。若いっつてのは要するに私より若い人。

上田 うーん。

大久保 ではこの辺で、この十年間で最も印象に残った事、プラス・マイナスを含めて話してくれませんか。青木さんから。

青木 いい話じゃないですよ。二号でしたか、校正やることにしていて、やったかやらないか、どういうわけか本が出来上がってしまっただけです。続編でみたら面白い本でした。ワープロで打ってて同音異語が出来ますね、あれで作った文章の様に愉快な箇所があちこちにあるんです。正誤表を作るのがいい仕事になりましたね、別刷りがついたのは後にも先にも二号誌だけでした。

加藤 犯人は私なんだ。調子の流れで校正までやったつもりが、実は穴だらけ。文章を楽しみながら読んでるの。原稿読みは校正すべからず、鉄則は守るべきですね。

村井 そうですよ。(笑)

青木 でも、今読んで見てもおもしろい。高島 文才があるわけでもないのに、何故委員になったかという親交会の会計やっていたからで、最初はいくらかかかるか見当もつかない。大岩先生が広告を取って歩く姿を見ていて、いやあ、これから先何年もやらせられたら大変なことになるなあーって。(笑) それからも一つ。加藤、小國先生、上田先生、まあ医者でありながら、なんて変な、おかしな才能持つてるもんだなあーって。(笑)

村井 雑誌を作る場合、創刊が難しいか、あるいは続けるのが難しいかを、よく問われるんです。普通の雑誌なら売れ行きが悪くなれば三号で止まる訳ですよ。親交会の雑誌だから保ってきたという意味もあるんですけどね。(笑)

要するに、捨ててもいいと思うものが捨てられない抵抗に会ったり、続けるべきものが何かの加減で没になったり、そういうことが若しあれば編集委員として反省しなければならんし、難しいもんだなあ、と思いますね。

大久保 私、十年になるんですが、清水高校のとき新聞部に居たことがあるので興味はあったんです。初めは出る幕じゃなかったんです。上田先生はじめ、そうそうたるメンバーでしたからね。おとなしくして居たんですけど、ロートルが引退してようやく我々の手に回ったんで、少し本腰を入れるようになったんです。

一番困ったのは残念ながら新制中学出でしよう、旧仮名遣いと当用漢字のちょうど狭間だったんです。送り仮名、テニヲハ、新旧漢字の違い……昔の辞書じゃ駄目なんので三冊ほど新しい辞書を買いました。この編集のために。

一番の思い出はですね、腰痛を起こしたことです。期限を気にするものですから、

何日か整理などにかかりつきりになるでしょう。それで腰が痛くて痛くて……本当に身を以て体験したというお話。

大岩 あんた、それ書けよ、書きなさい。(笑)

加藤 几帳面なの。まあ、死ぬまでやめられないよ。(笑)

澤山 腰痛は『波久鳥』のせいが多いんですか？

大久保 ええ、大部分、殆ど。

三村 十年がただ過ぎた感じですか。大学時代に新聞部に属していて(ほう、ほう)こういうことは嫌いじゃないんですが、この雑誌の特色・個性から言って、このままざーっと行ってほしいと思うんです。一年に一回ですし、このままのスタイルでいいと思います。

大岩 ちょっと言い忘れた事、さっきも言ったんだけど、うん、時期が良かったこと、人が良かったこと、これが全てなんだ。

加藤 何か注文はありませんか。

大岩 ん？俺かい？なーんにも無い。(笑)

小國 僕はね、先刻どなたも言っている通り産みの苦しみを踏んだのが一番よかった、という感じですよ。僕自身は創刊号が出て、あ、これは続くな、と思いました。その後離れてしまっただけから毎号贈って頂いてますが、親交会はたいへん懐かしいんです。

これからは新制中学の人が増えるだけですから編集も楽になるでしょう。カラーもよし、横書きでもかまいません。新人登用も結構、いつまでも続けて下さい。

児玉 ぼくはね、何でこの委員会に入れたのか全く見当がつかないんですがね。

(笑) 十一年目から変わりたいという話も出てますけどね、ポイントというか中心は出来てますし、大久保先生なんかは腰を痛めるほど熱中しているわけですよ。

じつは先生と僕と同じ宗派なんです、お寺の和尚さんも感心してました。すごい事だつて。幸松さんもスキーで一緒になるんだけど、大久保先生は几帳面で仕事はきっちりだから私達する事がないって。

だから私はね、加藤先生と二人、この二本の柱だけは残さんとね、あとは新人でも冒険でもどんどんやればいい。そう思ってますよ。

澤山 僕は勤めていた関係で親交会のことあまり知らなかったんですが、たしか高島先生に誘われましてね、何かお手伝いできたらと……もう七年になります。

硬い硬いつて言われてるんですが、そんなに硬くはないんで。(笑) このメンバーに入つてよかつたなあ、と思つたのは、皆さん僕にないものを持つていらつしやる、それがとても嬉しかったんです。

ゴルフに行つて僕なんかまだ若いんだ、と思つていましたら上の方にはもう何人も居ないんですね。(笑)若い人はよく動きまわすし、どんどん言います。ですから新しい人を入れて少しづつ変えて行けば、十年後には自然に変わつていくんじゃないですか。それでいいと思います。

大久保 最後は上田先生。

上田 わたし、一号の編集をやつたんですかね、正直ずいぶん悩んだんですよ。どんな性格にするかという事。横になつても読める様な、それから医者として以外の特異な体験をした人がだいぶ居る筈だと。古い人たちの忘れ去られている話もある、そんなあれこれ考えたんです。

今のスタイルは公平に見て面白いと思ひますよ。新しく、という話が出てますけどね、これは新しい人の寄稿があればいい事で編集に問題はないと思ひますよ。

それから、何号でした？木内綾さんのお便り、写真でそのまま載せましたね。あれはよかつた、すばらしかつた。

まあ、ご苦労さんでも一つよろしくお願ひします。

大久保 青木さんの住居が直ぐ近くなんでよかつたんです。やっぱり旧制中学は違ふなあ、とつくづく感じました。長田先生と木内さんのお手紙、僕は苦労しましたから。

加藤 この雑誌の性格は会員の皆さん承知してしますから原稿を受けるだけでいい。とすれば残るのはただ一つ、投稿が途絶えないこと。さらに望めば新人の原稿が増えてほしい、これに尽きますね。

上田 尽きます。医者の書くものは身内誉めとか一方的なものが多く面白くない、と部外者は言うんです。その人たちが型破りで面白いと言つてくれますから。

加藤 おかしい言い方ですが、この本がカクツとするか相当変貌する時は、親交会そのものの何かが大きく変わる時じゃないですか。まあ、流れるように流れて行く、ということですか。

『波久鳥』ある限り親交会は健在なり。この自負に燃えてやりますか。

大岩 うん、いいこと言つた。おれ感銘を受けた、うん。(笑)

大久保 なかなか(クビ)にしてくれない。(笑) それでは、看板もとうに過ぎましたのでこの辺でお開きに。(拍手)

あんらく

いす

## 私と政治

斉藤 修 弥

今から振り返ると私が政治、とりわけ選挙に関わるようになってから、早いもので十数年の歳月が過ぎてしまった。若気のいたりでのめり込んでいた中に、何時しか後援会長などという重い肩書きがついてしまった。今回たまたま「波久鳥」から原稿依頼があったのを機会に、自戒をこめて政治に関する所感を述べてみたいと思う。

とりつきは青年会議所現役時代の市長選挙であった。時の長谷川市長が三選なるか否かという選挙で、病気がちであった長谷川市長では、当時から色濃く出ていた室蘭の不況脱却は極めて困難であると多くの市民が自覚していた時代である。今こそ強力な市政立て直しの市長を選出しようという熱意が盛り上がり、岩田弘志候補が対抗馬として正式に決定したのは本番半年前のことであった。当然青年会議所にもお呼びがかかり、成り行き上私が岩青会なる青年組織を結成し、市内の青年団体とも同一の歩調をとりながら実際の選挙戦に於いて或る程度の評価を受ける活動をしたのが、今となっては災のもととなっている気がしてな

らない。

初めて臨んだ選挙戦の印象は強烈で、男の気持をゆさぶるスリルと興奮を体験した印象を今でも鮮明に記憶している。

一般に選挙は一度やると病みつきになるという話が喧伝されているが、あながち的はずれな話ではないものと思われる。この市長選挙がきっかけで道議選、知事選、衆議院選挙など幾多の選挙に関わることになった。選挙イコール政治と短絡的に考えられるものではないが、現実の地方政治においては選挙の占める割合が高いのも事実であろう。

これまで経験した幾多の選挙戦の中でも印象的なのは前回の知事選挙であった。横路知事二回目の立起に対抗して松浦候補を担いだ戦であったが、当初から圧倒的に横路優勢の下馬評のもと、松浦候補の苦戦は覚悟の戦いであった。私としては前回横路候補に対し三上候補が善戦し、僅少差で敗れただけに今度は是非一矢を報いたいと思っはせ参じたのだが、現実は余りにも私の予想をくつがえす状況であった。前回の三上候補への地元の盛り上がりとはうって変わる保守陣営の低調な支援の落差に愕然とするともに、選挙に対する市民の読みの変化、変わり身の早さに啞然とするばかりであった。結果は大方の有権者の予想

通り松浦候補の大敗であった。

然しながらこの選挙で私にはかけがえのない経験をしたと自省している。これは決して強がりではなく、負け戦すると人間が見えてくると云われた云い伝えが本当に身にしみるように自覚されたからである。あの選挙を通じて私は少し政治家と有権者の関係が理解できたのではないかと思う。

改めて政治家とは何かと考えると、大衆が望むこと、また欲していることを先取りし、明確に説得することが政治家の第一条件であろう。そして幸いに当選したならば揺るぎない信念と決断力をもってその公約を実行することである。それが実際に出来るか否かが政治家として本物か偽物かを問われる分岐点であると思う。

一方、有権者はどうであろうか。有権者の動きも不透明の部分が多い。私の直感では有権者は政治家の動向を気にするよりも世の中の流れ、それもマスコミがリードする世論という多数派意見に先を争って、敏感に反応していく雰囲気を感じられてならなかった。これは組織、団体、個人を問わず同じ傾向で、基本的に政策を徹底的に討論する方策を敬遠し、感情的あるいは単純なムード選挙に迎合する日本民族の特性ではないかと思われる。

今年に入って自民党は各種の選挙におい

て敗北した。とりわけ参議院選挙は自民党にとって歴史的な敗北であった。ここで示された民意は、これまでの自民党政治に対する明確な拒絶であると思う。投票の結果は一つの方向を示しており、いつときの感情による結果ではないのではないかと思われる。政治の構造に戦後初めてといったような変動が起こっており、有権者は消費税導入とリクルート事件によって政治への関心を強めざるを得なかった。それが今度の選挙で「これまでの政治のあり方を変えたい」という思いにかり立てられて投票所に足を運んだ有権者が多かったのではないだろうか。自民党に対して厳しい結果になったのは当然である。今、政治は出直さなければならぬと思う。三十余年の一党支配の間に自民党は謙虚に民意をくみ上げる姿勢をいつの間にか忘れ、どんな「無理」でも通用すると錯覚したのではないだろうか。

一方社会党には「追い風」が吹いた。きつと同党幹部でも予想できなかったような勝利であろう。各種の世論調査ではこれまで自民党に投票していた女性や若いサラリーマン、学生などが自民党離れを起こしていることが明らかになった。したがって社会党の勝利は自民党の失政によるどころが大きいといつてよいだろう。

衆院と参院で多数派が異なることは悪くすれば政治の混乱を招くかもしれない。だがたまたま出来たこの状況を議会政治活性化のチャンスにすべきだと思う。そのためには政治の目標をもっと高くかける必要があるのではないだろうか。海部首相は就任早々の記者会見で「対話と改革」というスローガンをかけた。参院における与野党逆転の現状を考えると決して悪いスローガンではないと思う。しかし全体的にみると世代交代の期待にこたえて登場した若い首相の発言としては、政治を変えていく熱い気概が国民に伝わってこない発言ではないかと思われる。

海部首相は政治や消費税等の改革といった内政問題だけでなく、世界の中の日本というスケールの大きな難問に立ち向かう気迫を吐露すべきだと思う。政治家は年令的に若いというだけでは意味がないのではなからうか。改革への情熱と勇気を実行してこそ若さと云えるのであり、若い首相の今後の活躍に注目して見守りたいと思う。しかしながら我が国の政治も確実に変化の兆が見える気がしてならない。これまでの数少ない経験からみても、政治の風土あるいは「政治文化」にこのところ変化が読みとれると思う。その意味で私たちは今、重要な変わり目に立っているのではないだ

ろうか。

変化の兆とは今回の参院選挙について保守系のプロが「この選挙ほどカネのからぬ選挙はなかった。とにかくカネを使つたらかえって反感を買うのだから」と云つていたのは興味深い。「政治文化」の変化は要約すれば政治や政治家を何か利益を得るための対象と見るのをやめて、自分自身を政治の主役と位置づけるようになったことだと思ふ。まだそこまで断言するのは早いかも知れないが、その方向に動きつつあるのは間違いないのではないか。

国民の「政治文化」の変化に応じて政治も変わってくるだろうか。政治家はこれまでの恩典の配分者としてではなく、いろいろの価値の代弁者、調整者としての働きを要求される時代がきていると思う。

ひるがえって周辺を眺めると、これらの変化は単に政治の世界に止まるものではないと思う。医師と患者、医師と地域社会、或いは日本医師会を頂点とする医師会内部においても、確実に変化の兆は現われており従来のしがらみや慣習を打破する理念と行動が必要とされているような気がしてならない。

そういう意味で私にとつて、躍動期に入った今の政治は我が身のすぐそばに在るといふのが偽わらぬ実感である。

## ウィーンの寅さん

上田 智夫

### 寅さん

つい最近（平成元年八月現在）、フリーターの寅さんの最近作が上映された。一度も寅さんの映画を見たことがなかったのだが、ロケ場所がウィーンという事なので映画館に足を運んだ。お客さんは八人、これでも最近はやや平均的なお客だそうであるが、前の席に見おぼえのある人が座っており、上映が終わってみるとやはり岩田室蘭市長さんであった。曾遊の地ウィーンが懐かしくて見に来たとの事で、このあと二人で思い出を語り合った。

ウィーンは安齋先生が時々行かれていますし、吉井先生のお嬢さんは音楽の勉強で、本庄先生の御子息は医学の研究で永在住しておられたので、一寸出掛けた私が旅行記を書くのは当を得ていないが、雑誌の埋め草にとの要請を受けていたので、室蘭の寅さんの行状記として書かせて貰った。

### ミュンヘンまで

某月某日、たまの休みを利用してオーストリア周辺の旅に出た。本物の寅さんと違ってスポンサーはいない。黒猫ヤマトの言い草ではないが「旅は手ぶらでなくちゃ」とばかり、ABCを利用して成田カウンターまで荷物を先送りした。手ぶらで成田に入ったのはいいのだが、空港は超混雑で寅さんの荷物はなかなか出て来ない。集合時間は迫ってくる、寅さんたまたま荷物の山に踏みこんで、汗だくでやっと自分の荷物を探し出した。混む時には面倒でもラゲージは持参がよい様である。

予定であったルフトハンザでなく、飛行機は悪名高いJAL。コペンハーゲンで乗り換えてやっとルフトハンザ、お目当ての一つだったお土産用のオリジナル時計を買った。

フランクフルトの入国はパスポートの表紙をチラッと見るだけ。同行の一人曰く、「これじゃ成田出国、入国のスタンプだけで、どこに行ってきたのかわかんないや」と残念がっていた。寅さんも、「スタンプくらい手を抜くな」と威張って見たかったが適当な言葉がわからないのでやめた。ライン下りは、「ねずみの塔」「猫の城」

「プファルツ城」など覚え切れず、「ローライ」も一瞬の間、名所、旧跡は、柴又の帝釈天の様に一箇所に離れているのがないな。

ロマンチック街道は、ローテンブルグで昼食だが、どこも人の波、市庁舎の前のマイスタートルンクも黒山の人だかりで頭越しに見るだけ。強行軍と飲みすぎでややお疲れ。

ノイシュバンシュタイン城はムード満点の雪の中だが、これも城の前で一時間、独英、仏、伊の各国語のガイドの他に、サービスで日本語解説もあり、この順番を待つて更に二十分くらい。寅さんには有難いが、旅行案内などで大方の人が知っている、ルードヴィヒ二世とワグナーの関り合いが主で、城は外から眺めた時が最高であった。

### 夜ミュンヘン

ホテルで酸っぱいキャベツを山盛りに食べさせられ、畜生食費をケチツたなど思ったが、これはザウエルクラウト。折角のミュンヘン、食事の後ピヤホールにでもつれていくかと思っていたら、面倒がつて尻込み。ここで寅さんのおせっかいが頭をもたげ、「ホーフブローイハウスに行つて来る」と言うと、忽ち同行八人が集合。責任は重

いがアポイントは取っていない。ままよとばかりハイヤーを呼んで「ホーフプロイハウスへ」。さて、このヒットラーのミュンヘン一揆で有名なビヤホールは、店の前に長い列が出来ている。悪い事とは知りながら素知らぬ顔で店内へ、マスターと覚しきおっさんに、

寅「空いた席はないか」

マ「空席はない。並んで待っている」

寅「我々は日本から、この有名なビヤホールにやって来た。何とかならないか」

マスターは首を振るだけ。夢中なので、動詞と固有名詞はドイツ語、一部英語もまじり時に日本語も入っていた様だ。

寅「英語をしゃべるスタッフは居ないか」

マ「彼が話す」

とボーイを呼んでくれた。今度はドイツ語まじりの英語で、手まねよろしくしゃべると、

ボーイ「OKこちらに來い」

と空いた席に案内してくれ、面目をほどこしたがドツと冷汗が出た。ビールのグロースを二杯飲んで驚かれたが、何、ドイツ人は五、六杯は飲むよ。

翌日ガイド氏にこの話をすると、その押しがあればツアーガイドがつとまるよとあきれ顔。

## ザルツブルグ

オーストリアへの通関は例によってフリーパス。インスブルック一泊後、モーツァルトと「サウンドオブミュージック」の舞台、ザルツブルグ。夕食後、ドレスアップして、カフェウインクラーへ、同行者なく寅さん一人。この店はザルツブルグを見渡す丘の上にあつて有料エレベーターで昇るが、上階はカジノである。ボーイに案内されて席につくが、まわりに日本人はいない。ここからの眺めは、ライトアップした宮殿、街の輝き、遠くの山道を走る車のライトの列など、痛く寅さんの気に入った。食事、ワインとも約五百シリング（五千円一寸）は、日本では考えられない値段である。

街の案内が一寸わからないので、離れた所で食事している日本人らしい人と外国婦人のカップルに声をかけてみた。

寅「エクスキューズミー、マダム。メイ

アイ、トーク、ウイズ、ユア、パートナー」

マダム、「イエス、シユア」

勿論、勇を鼓して声を掛けるまで二、三回口の中でブツブツやってみてからである。ところがこの紳士は、ロサンゼルス胸部心臓外科の横山太郎氏で、もう日本語も一

寸つかえぎみであった。

帰りのタクシーでメーターが来る時より一寸多かったが、チップを含めて支払うと、「ナイン」。実はデジタル表示の上の表示は時計で、メーターは下にあつた。大笑いをしたが、理由のない料金を受け取らないオーストリア人気質に、寅さん思わず「えらい」。

## ウィーン

宿泊は市街から五十分かかる所だったが、地中海クラブの姉妹ホテルとかで、行程の中の唯一のデラックス。テニス、ゴルフ、プール、アーチェリー等々完備。日本びいきの女の子がピアノをひくバーで、気持ちよくドクター・ラヴィックを気取ってカルヴァドスを飲んだ。

何分ホテルが市街から遠いので、出たら帰る迄の時間は貴重である。ベルベデーレ、シェーンブルン等一通りの観光ののち、ツアー一同「われらに自由を」。三時間後にオペラ座の横に集合するからとねじ込んだ。ガイド氏難色を示すも、一方的に押し切つて解散。

ウィーンは、リンクと言われる環状の部分に、オペラ、シユテファン寺院、ケルントナー通り、美術史博物館、王宮、市庁舎、

国会議事堂、ブルグ劇場、市立公園等がスッポリ入っていて、一人歩きには絶好である。ただ美術史博物館は長蛇の列で、待ち時間一時間と聞いてあきらめた。市庁舎の食堂、ラートハウスケラーの騎士の間、リッターザールで食事と思っていたが、満杯でお断わりされ、オペラ座の真裏にあるホテルザッハーでコーヒートとケーキにする。有名な「ザッハートルテ」は、ガイド氏の説明では四百六十カロリー、ウインナーコーヒートもでは六百カロリーあるとの事、猛烈な甘さと一寸洗練されない感じだが、永い伝統の味とはこんなものか。

すぐ近くのブティック和光は、プチボワンの手軽なお土産には、日本人店員もおりすぐ免税手続きも出来るので便利ではある。ケルトナー通りでは結局オーストリア煙草ベルベデーレを買った位か。

ウイーンの現地ガイド氏は自称「ニセ、ベートーベン」。第三の男で有名な遊園地プラーターから、ウイーンの森、ハイリゲンシュタットと案内したが、本業はウイーンの音楽学校の助教授とかで、寅さんと同じく放浪癖のあったベートーベンの十何番目かの下宿の一つで、手書きの楽譜や、ハイリゲンシュタットの遺書について説明し、成る程一応のプロだなと首肯はさせた。しかし寅さんの的屋テキヤの感では、ローマヤパリ

でもよく出会った、志を抱いて勉学に赴いたものの色々な事情で挫折し、プラーイドだけが鼻について観光に来る同胞を一段下に見下しながら、実はガイドの収入が本業になっってしまった一群の人々の一人の様に見える。寅さんの様に常々、「生れたまま育った」「犬を飼う資格がない」などと言われ屈折した思いをしている人間には裏側が見えるのかもしれない。

夜はグリーンツインのホイリゲ（新酒の居酒屋へ）でさよならパーティー、あまり盛り上がらないので髭のアカordeイオンに声をかけて、菩提樹、ローレライ、会議は踊るから、お別れのオールドラングザインの頃には同行の人達も大分参加し、ドイツ人、フランス人、英国人の団体も、手を振り合唱に加わって、さようなら。

数々の思い入れでおとずれた、ウイーンの街のベートーベン、シューベルト、モーツアルト、ヨハン・シュトラウスなどの音楽家、ゲーテ、シラーの文豪、宮廷のマリア・テレジア、カール大公、プリンツ・オイゲン等の政治家など数え切れない銅像に敬意を表しつつ、「アウフ、ヴイダーゼーエン」。ウイーンの街よさようなら、また必ずやっつて来ます。



ベートーベンの下宿

ホーフブロイハウスで「乾杯！」





さ よ う な ら

グリンツインのホイリゲ



# der Punkt

竹内 隆一

## 第一話

ゲーテ ファウストの第二部は Das Ewig・weibliche zieht uns hinan で終わっている。／永遠に女性なるもの、われを招きよするよ／である。 茅野 蕭々 訳

学生の頃のある夏休のこと、慶応に行つた友人から聞いた話。

茅野教授のファウストの講義は学生を酔わせるような名訳で終つた。

学生 永遠に女性(的)なるものとは何ですか？

茅野 それはね、der Punktですよ、分りませんか。

教授はおもむろにチョークをとつて、黒板一杯に最もシンプルかつ原始的な女性のシンボルを描いて、教室を出て行かれた。

(当時、女子学生は居らなくて幸いであつた) 茅野 蕭々(ちの しょうしょう) 明治、

大正、昭和期のドイツ文学者、三高教授を経て慶応大学教授。ゲーテおよび近代詩の研究で知られている。

## 第二話

老子 上編 第六章

谷神不死、是謂玄牝、玄牝之門、是謂天地根、綿綿若存、用之不勤

谷神は死せず、是れを玄牝と謂う。玄牝の門、是れを天地の根と謂う。綿綿として存するが若し。之を用うれども勤まらず。

### 註訳

玄牝 玄は神秘な。牝は牡に対して女性であり、したがつて物を生み出す力である。ゆえにその「門」が天地の根であることは容易に理解出来る。

綿綿若存 いつまでも続く。

用之不勤 尽きはてることがない。

老子は難解である。どういうふうにも解釈出来る。何を言っているのかわからぬところが沢山ある。非常に飛躍が多い。(老荘研究の第一人者 小川環樹博士)

老子は孔子の教えに対するアンチテーゼである。(湯川秀樹博士)

### 参考資料

世界の名著 老子 莊子 中央公論社

# 純血教育

室江 蘭

今は時効の一昔前、某女子短大の校長より「純血教育」について学生に一席ぶってほしいとの書面による丁重な依頼を受けたものである。如何なる理由で産婦人科医の小生にお鉢が廻つて来たのか知る由もないし、「純血」は「純潔」の間違いかとも思つたが、要は道学者風にパンツの紐をしめ直すよう説教せよとの意に解した。

女臭い教室に入っていくと、黒板に「純血について」と血の字がついた演題が書いてある。先ずは性教育の序論をはじめ、例えば初潮教育のところでは、小学校三年の子供が母親に月経発来を告げると、「もう来たの、いやねえー」という母親の心ない言葉に深く傷つき、以来月経困難症に悩む實際例など、又STDの話や、若年のセックスは子宮癌になる率が多いとかのオドシも適当に入れた。

真剣に頷く学生に氣をよくしておつたが、終り頃について脱線して仕舞つたのである。如何なる卓見も、一寸の脱線で脆くも潰れるという典型であつた。よく医事評論家の健康に関するハウ・ツウ物で、一ヶ所医

学的に納得し難い事が書いてあると、あとはもう読む気がしなくなり、おつぱり出すことがある。ある医大の教授は大の嫌煙家で、ある座談会で、「タバコを吸う医者に名医はいない。私の教室では全員に禁煙を誓わせている」といつているが、この一言でこの有名教授の学説まで信用出来なくなるのである。反対に学生時代の授業中、脱線というか漫談ばかりで時間が終る教授がいたが、名講義として印象に残っていることがある。

さて当日の脱線、言わなくてもな部分はこうである。

「皆さん、精子免疫という医学用語がありまして、処女が男性を受け入れると、膣、子宮より若干でもザーメンが吸収され、血中にその男の抗体が出来、もはや純血ではなくなるのであります。古来純血を保つことの大切さは動物の世界でもそうでありまして、名サラブレッドが一度でも駄馬と不倫したりすると、それ以後は血がにごり、名馬は生まれなくなるので、馬産地では殊の外、管理に氣を付ける訳であります。

この事は犬や猫でも同様なのであります。（真赤な嘘）添いとげれなかつた深い仲の彼氏をあきらめて他の男と結婚したが、子供が昔の彼氏の顔にそっくりになつて来て、嫁さんが仰天するという話がよくあります

でしょ。（全くない）

今まで真剣に聞き入つていた学生がざわめき出したのは当然である。今この話をヤングにしたらどうであろうか。「彼氏の痕跡が私の体に残っているなんて素敵ジャン」とか「せめて子供が前の彼氏に似てくるのは満足」とか純潔教育も逆効果になるのではありますまいか。

講演が終つてからの質疑応答で「結婚に際して非処女を告知すべきかどうか」というのがあつた。相手がみだりに他に告知する場合もあるので、癌の告知とは又別のむずかしさがある。どんな答を出したか記憶にないが、終始コンドームさんの世話になつていれば純血であつた（純潔ではない）と告知してよろしいと解答して失笑をかけたのを覚えていた。

因みに今はコンドームさんなどと云わず、例のエイズ騒動以来プロテクターというのがナウな名称で、また生娘という語は死語になり発音上既娘と解されるのでヤングに對する言葉使いには留意する必要がある。

汗をふきふき忸怩たる思いで退場したので、校長室でうやうやしく出された講師謝礼は固く辞退申し上げたことは云うまでもない。

平成元年

## 親交会旅行

7月8・9日

旭川パレスホテル泊



## 快晴の旭岳

黒光康夫

今年の親交会旅行は好天に恵まれた旭川方面一泊旅行であった。七月八日の旭川は気温三十度で快晴。低温海霧の室蘭から見ると全く羨ましい。一夜明けた九日も朝から快晴で雲一つない。午前八時、投宿したパレスホテルをデラックスバスで出発、途中旭川空港に隣接する東神楽の大雪山カントリークラブでゴルフ組を降ろす。

バスは旭岳を目指し天人峽との分岐点を左折する。道は急勾配となり、原生林の中の全面舗装の道路を快適に登り、旭岳温泉を通り抜け、やがて終点の旭岳ロープウェイ駅駐車場につく。交通の至便さと、最近のレジャーブームのせいか、若人は勿論の事、老人や幼児をまじえた大群衆に吃驚する。登山に詳しい人の話では、こんな雲一つない上天氣の旭岳は非常に珍しいと言う事だ。

四十分程待つてから定員四十六名のロープウェイのゴンドラに乗り、眼下にダケカンバ、ハイマツ、アカエゾマツ等の原生林や残雪を眺めながら、天女が原駅を中継し三十分程で姿見駅に着く。

そこは高度千二百米、すぐ近くに残雪があり、そこを通って登山道が続いている。暫く登って行くと、左右にキバナシヤクナゲやエゾツガザクラ等の高山植物の花の饗宴が人々の眼を楽しませて呉れる。

やがて展望台に着く。眼前に二千二百九十米の主峰旭岳の雄姿が迫る。その右に白雲岳、左に北鎮岳、更にそれに連なる大雪連峰の展望が素晴らしい。旭岳中腹からは四、五条の噴煙が盛んに上がっている。その左右に登山道が続き、登山者が登っている。右側を登ると途中に姿見の池と旭岳右室がある。

突然、スピーカーで監視員から登山道のロープからそれてお花畑に入り込まないよう注意を受けている人がいた。先日も高知大学教授が高山植物を盗掘して告訴された由。登山のマナーは守りたいものだ。

時は過ぎ駅前で記念写真を撮りゴンドラに乗る。静寂を破りウグイスの鳴き声が聞こえる。水芭蕉が咲いていると誰かが言う。バスで少し下がり旭岳温泉に着く。昼食のジギスカン料理に舌鼓を打つ。適度の運動と空腹で食事が旨い。然し気温が三十一度でクーラーがなく、また窓からは熱風が入り暑かった。

食後入浴の時間もなく、二時過ぎ再びバスに乗り帰路に就く。車窓から見る旭岳は

急に雲がかかり五分程でまた雲が去り、山の天候の激変に驚く。

途中ゴルフ組を収容し、バスは高速道路を經由して午後八時室蘭着。室蘭は矢張り雨でした。

## 医師親交会旭川旅行記

齊藤 甲斐之助

7月8日、9日と一泊二日の旅程で恒例の医師親交会旅行が催されました。大岩先生、畠山先生が中心となつて企画立案され、私自身も幹事の一人としてお手伝いする立場にあつたのですが、余り役には立たなかつたようです。

今年度は旭川市に一泊のうえ大雪山をロープウェイで姿見の池まであがり、付近を散策した後、旭岳温泉に降りるといふハイキング組と、大雪山カントリークラブで終日ゴルフを楽しむゴルフ組とに分れ、両日共に素晴らしい天候に恵まれて無事全日程を終了し、予定通り8時過ぎに室蘭に帰着しました。

私にとつては久しぶりの旭川で、大雪山では学生の頃に、随分とスキーを楽しんだ思い出はありますが、夏の姿見の池は知らなかつたものですから、ハイキングのほう

にも食指が動いたのですが、今回はゴルフを楽しませていただきました。

後で分つたことですがゴルフは3組を予定し、確保していたところに15名の参加希望があり、畠山先生を慌てさせ、懸命の努力をなさつたのですが、結局4組はとれず畠山先生を含む1組は旭川市近郊の旭川ゴルフ倶楽部(台場ゴルフ場)をラウンドするということになりました。

さて、旭川までは道南バスの誇る豪華サロンバスによる大名旅行ということで、市内各所で先生方をピックアップした後、登別室蘭インターで最後に皆川先生が乗り込んで全員集合し一路旭川を目指しました。

このバスの正面にはメルセデスベンツのマークが誇らしげについておりまして、中央より後部は仕切られて別室となつており、何やら怪しげな雰囲気か漂っているという代物でした。後程このバスは10年近くを経過した中古物件であることが判明しましたがさすがにベンツ、終始快適な旅行を提供してくれました。

少し前までは室蘭から旭川まで車で行くには多少の覚悟が要求されたかと思いますが、現在道央自動車道は滝川まで伸びており、各サービスエリアでトイレタイムをとりつつ4時間半で旭川市中心部のパレスホテルに到着しました。

天気は上々で、バスの高い座席から石狩平野を横に見ながらビールを片手に談笑し、神居古潭を眺め、ガイド嬢の美声に聞き惚れながら、まだまだ明るいうちに旭川市内に入りました。ホテルまであと十数分という所で後方座席よりSOSがあり、某先生の膀胱が非常に危険な状態に陥つたのとこととで、ついに止むを得ず、臨時停車いたしました。バスの正面には例のベンツマークの他に「室蘭市医師会御一行様」という紙も張つてあり、次回からはベンツではなくともトイレ付きのバスを仕立てることが幹事の責任と恥じ入つた次第です。

宿泊は旭川パレスホテルということで、地方都市の「パレスホテル」には余り期待しない方がよいという大方の予想に反し、昨年新築オープンしたばかり、設備も良く食事もまずまず、36街にも近く、今後旭川で宿泊予定の方にはおすすすめいたします。旭川の夜はいろいろとあつたようですがこの部分は省略いたします。

翌日、例年はゴルフ組には送迎の手段は用意されないとのことでしたが、今回は親切にも大雪山カントリークラブまでバスが寄つてくれるというスケジュールになっておりました。気温は順調に上昇し、午後には32度近くまでに達し、まさにサウナ風呂の中で棒を振り回すようなラウンドでした。

私事になりますが、最近、自動パン焼き器というものを手に入れて、毎朝焼き立てのパンを食べているのですが、これが実に美味しくてついつい朝から食べ過ぎてしまうせいか、体重がオーバー気味だったものですから元に戻す絶好のチャンスではありません。

ラウンド後ひと風呂浴びて確めたところ確かに3kgの減量に成功したかのようにみえたのですが、失った水分以上のビールを腹に流し込み、帰りの車中で旭川駅特製の駅弁を食べてみると結局は何にもならなかったようでした。

大雪山登山の方も、後程、写真を見ると絶好の天気にも恵まれたようで、写真に写される時はよほど気難しい人でも大抵は笑顔を見せるものですが、どの顔もとびきりの笑顔で写っているのが印象的でした。

バスの方は親切にも大雪山コントロール、そして帰りには台場ゴルフ場にも立ち寄り、もう1組を拾い上げて、同じ道をたどって室蘭へと向かいます。島山先生方は何とこの猛暑の中1ラウンド半回ってきたとのこと、さすがにプロは違うと感心させられました。

予想していたような渋滞もなく順調なドライブだったのですが、用意していたビールが底をつき、高速道路のサービス

エリアには酒類の自販機はない、という新しい発見をしました。考えてみればその通りなのかも知れませんが、道路公団も民営化されれば少しは考えも変わるのでは、などくだらないことを考えているうちにバスは雨の室蘭に到着いたしました。

## 編集室へのお便り

前略 このたびは波久鳥第九号をお送り頂きありがとうございました。嬉しく拝読致しました。

東町旧医院の管理の為、今でも二ヶ月に一度位は室蘭を訪ねて居り、相変わらず中島町あたりを時々うろついて居りますので会員の諸先生方にもたまにはお目にかかる機会があるかと思えます。

会の益々のご発展と皆様のご活躍をお祈り申し上げます。 草々

函館市広野町六番

広野町住宅四〇三一二二番

山本 健三郎

(六三・一一・二二)

拝復 本日はまた御心にお懸けいただき「波久鳥」第九号御恵送下さいまして誠に

有難うございました。

一昨、昨日と急に雪と風が訪づれて些か悲しくなつて居りましたが、波久鳥の訪づれと共に先程から青空と最涯の陽光が目に見えて居ります。

編集委員の方々の御尽力の程頁毎に読みとれます。

六十二年十一月に親交会の香港マカオ旅行があった由、恰度私も其頃アジア・オセアニア学会で其方に行つて居りましたので一入懐かしく感ぜられます。

六十三年も旬日を経ず終ろうとして居りますが、医師会親交会のご発展ご隆昌と諸先生の御健勝を遥かに祈り上げて居ります。

稚内市こまどり二丁目七一

国療稚内病院

小國 親久 (六三・一一・一六)

御無沙汰申し上げておりますがその後は御清祥のことと存じ上げます。

此の度は貴会誌御送り下さいまして誠に有難うございました。

当方も御蔭様で無事通ごしております。会員の皆様方によろしくお伝え下さい。

まずは右御礼まで

静岡県田方郡中伊豆町上白岩一〇〇〇

中伊豆温泉病院 斎藤 幾久次郎

(六三・一一・二二)

本日は波久鳥を御贈り頂き有難く拝見致しました。厚く御礼申し上げます。

日立市大久保町一丁目の三

稲葉眼科医院 稲葉 真

(六三・一二・一五)

例年と異った重苦しい気分の年末もあと十日余りで終りますが、日頃御無沙汰ばかりで恐縮に存じて居ります。

室蘭医師会の諸先生にはお変りなく御健在で御活躍して居られる事と推察申し上げます。同慶の至りに存じて居ります。

此度は又「波久鳥」第九号を御郵送下さって有難く受取りました。丁度私の農閑期に入って居りますので楽しみに拝読する事に致します。

去る十月初めて海底トンネルを通って渡道致しましたが便利になり御地も近くなつたと思われました。洞爺湖東湖畔の墓参をすませてから久しぶりに室蘭に寄り、新日鉄病院や本事務所を訪ねて挨拶致しましたが、高田、古賀、本庄、中村、大岩、飯島の諸先生に再会してお互いの健在を喜ぶ事が出来て何よりでした。

御蔭様で変りなく元気に過ごして居り、来る二十日の町の健康相談と二十一日の鴨川保健所の乳児相談の仕事で全部終了致します。

例年より厳しいこの冬諸先生には呉々も御自愛下さってお元気で良い新年を迎えて下さい。

一筆急いで受取の御礼を申し上げます。

千葉県千倉町瀬戸二二六〇

高橋 清藏

(六三・一二・十八)

拝啓 本年も暮れようとしています、編集に当られた諸先生には、愈々御健勝にてお過ごしのことと拝察致します。

さて、波久鳥第九号御寄贈に預かり、厚く御礼申し上げます。読み続けるにつれ、貴親交会の御活躍ぶり又諸先生の御様子もそれと知られて、慶賀に耐えない次第です。小生室蘭を離れて十年目になりました。

四十年間の在蘭生活でしたので、知己、友人、自然が懐かしく懐旧の念一入の余生の明け暮れですが、波久鳥に織りこまれた諸先生の面影が去来して、思いは次々と拡がって心の暗れる思いです。

来年度は創刊十号の事とて、又一段と素晴らしい記念号に取り組まれる事と、楽しみにしています。

何卒諸先生にはよきお年をお迎いあるよう祈念しながら、延引ながら御礼の言葉と致します。

市川市柏井町一の一七九一

敬具

長田 廣  
(六三・一二・二〇)

本日 波久鳥お送り頂きまして誠に有難う御座居りました。

歳の瀬も迫り新しい年に向って皆様の御健康と御多幸をお祈り申し上げます。

札幌市南区川沿十三条一丁目

峰本 和枝

(六三・一二・一六)

真白い大雪と共に「波久鳥」がとどけられました。

毎号変る表紙の美しさ、編集の方々の細やかなお心配り、先ずそこから初め諸先生方、お元気で御活躍の御事など、たのしく拝読させて頂きました。

いつもお心にかけて頂きありがとうございます。

厚く御礼申し上げます。

札幌市北区新琴似七条二丁目一一二〇一

二一六 木谷 静子

(六三・一二・一七)

今年も残り少なくなつて参りました。諸先生にはお変りなく益々御活躍の御様子何よりと存じ上げて居ります。

此の度波久鳥お届け下さいまして有難う

ございました。

本をひらく度なつかしさ一人に拝見致して居ります。仏前にもお供え致しました。主人もさぞ喜んでる事と思えます。

先生方の変らぬ御厚意感謝申し上げております。お寒さの砌御自愛遊ばし佳い新年をお迎えなさいます様念じ居ります。

御礼まで

かしこ

水戸市千波町三五九一二

松岡 志げ子

(六三・一二・二三)

鹿児島県肝属郡医師会

会長 東 達郎

肝属郡医師会立病院

院長 津崎 邦英

拝啓 貴台益々御隆昌の段お喜び申し上げます。

さて、この度「波久鳥」を御送付いただきました。誠にありがとうございます。

早速、当医師会・医師会立病院の運営ならびに学術研究の参考にさせていただきますと共に、永く当院の図書として保存させていただきます。

先ずはとりあえず書中をもって御礼申し上げます。

敬具 (六三・一二・一五)

雪が舞い北の国も冬の序章でございます。

この度は「波久鳥」を御恵与頂きまして誠にありがとうございます。

心よりお禮申し上げます。

新しい年も益々のお栄えを念じ上げております。

このころばかりのお禮をお送り申し上げます。

御笑納下さいませ。

先は心よりお禮申し上げます。

かしこ

旭川市神居町高台 優佳良織工芸館

木内 綾

(六三・一二・二〇)

市立室蘭図書館長

時下、ますますご清祥のことと存じ、お慶び申し上げます。

このたびは、下記図書資料をご恵贈賜り厚く御礼を申し上げます。早速整理保存のうえ、広く市民の方々にご利用頂く所存でございます。

今後共、よろしくご協力下さいますようお願い申し上げます。

ご寄贈図書 波久鳥 第九号

(六三・一二・一四)

### 親交会のおもな行事

○ 受賞祝賀会及び忘年パーティ  
昭和63年12月9日

於 室蘭プリンスホテル

○ 平成元年度定期総会・懇親会  
平成元年5月25日

於 ホテルサンルート室蘭

○ 親睦旅行

平成元年7月8日・9日

旭川・旭岳温泉

○ 秋の行楽会

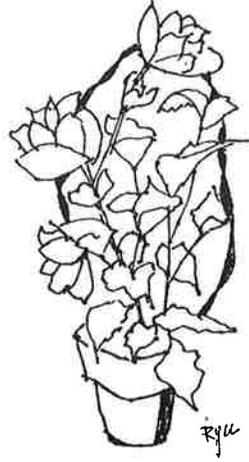
平成元年9月13日

於 亀田記念公園

### 会員異動

昭和63・10～平成1・9

年 月 日	事由	氏 名
1・3・21	逝去	成 松 高 明
1・3・31	転出	大 原 吉 輝
1・3・31	転出	高 橋 長 雄
1・9・30	転出	石 川 秀 人



## 編集後記

それぞれのテーブルで話はずんできています。パロック音楽が流れています。安齋先生の選曲でしょう。

上田会長と高田先生をかこんで旅の思い出あれこれ、卓上には写真やスケッチがならべられています。

あるいはうなぎ、あるいは反論、じっくりと真剣に。高橋先生の席でした。

「緒方洪庵って知ってたかい？あんだ」阿

部先生が若い人に聞いています。

斎藤先生のテーブルもにぎやかです。今年には参院選挙を中心に政界はあふれる程の話題を提供してくれたからでしょうか。

「室江蘭はやはり先生だったの」竹内先生はじめギネの方たちの顔が見えるテーブル、ひとしきり笑い声が高まりました。

誰かが室町小歌を口ずさんでいて……。そんなサロンの様子を思い描きながら、

後書きのワープロをたたいているわけですが、十年は、あつという間でした。

創刊十年目だからと特に改まることもないですよね。編集屋の座談会でもやりませんか。それでいきましょうや。

何はともあれ一つの節目、編集の先生方それぞれに幾つかの問題点は当然うまれていたわけで、それを会員の諸先生にも知っていたどころ、そんな寸法でした。

基本的には自然体で行こう、ということになりましたが、編集屋にしてみれば気のつかうこと難しいことです。季節々々の風のように時を得た程よき新風の吹き入れもまた自然の理にちがいありません。

ふいに、何の関連もなく測量山の哀れな姿が目には浮びました。削り、むしり、伐り、だけど俺達は化粧してやっているんだぞ。そんな阿呆な錯覚だけは持ちたくない、と。

(加藤)

## 「波久鳥」十号編集委員

加藤治良	村井 乙	澤山 豊	児玉 直彦	遠藤 秀雄	神島 章	三村 博通	大久保 洋平
------	------	------	-------	-------	------	-------	--------

親交会誌  
波久鳥

発行日 平成元年十二月五日  
発行所 室蘭市医師親交会  
印刷所 室蘭印刷株式会社